

花山信勝講演録『回顧六十年』

青 木 馨

花山信勝（1898～1995）は、東京大学教授、東洋大学教授、國學院大学教授を歴任し、『三経義疏』を聖徳太子真撰と判じて、一貫してその註釈研究を継続かつライフワークとした著名な仏教研究者である。しかし、戦後太子真撰が否定され、これが定説化されるとともに、その業績はあまり顧みられなくなった。ただ、彼の研究成果や出版物が、以後の太子研究や法隆寺研究の拡大深化に大きく寄与することになり、その点では忘れてはならない存在であろう。

また、彼は研究者の顔とは別の特殊な体験をもつことでも知られる。第二次世界大戦後、戦争犯罪者を裁く極東国際軍事裁判や横浜裁判が行われ、容疑者が巣鴨プリズンに収容された。その収容者たちの教誨師に任じられ、結果的にA級戦犯者らの処刑に立ち会った唯一の日本人ということになった。

ここに、昭和55年（1980）7月24日、『回顧六十年』と題する4時間に及ぶ講演録音がある。自坊蓮成寺における一般聴衆に対する仏教講座での花山信勝の講話で、私が録音しカセットテープで保存していたものである。午前2時間、午後2時間、計4時間にわたり、これだけ丁寧に話したことはないと語っており、おそらく花山が最も詳細に語った回顧談だと思われる。これは、翌々日（7月26日）法隆寺夏季大学30回記念における『回顧六十年』の講演のために用意された内容であるが、法隆寺では1時間15分程度の講演予定であったという。

花山自身の回顧談であるが、大正期から戦前を中心とした当時の仏教の学問世界や、法隆寺での聖徳太子1300回大遠忌の経緯などにもふれており、大正期から戦後の斯界において従来あまり知られていない事柄にも言及していると思われる。100年前の事象や戦前・戦後を見聞している本人の音声録音は、今では学術的価値もあると考え、ここに文章化して紹介することとした。

内容は大きく三つのテーマに分けられる。第一は、自己の研究（『法華義疏』などの『三経義疏』の研究）の端緒から出版に至る経緯。第二は、昭和21年から23年（1946～48）の巣鴨プリズンにおける戦争犯罪者教誨の内実。第三は、昭和34年（1959）東京大学退官後、所属宗派である西本願寺の要請による10年間の北米開教監督時代の回顧談である。学術的に特に注目されるのは主に第一の部分である。

花山は、西本願寺・大谷光瑞の私設学校である武庫中学に進学するが、ここで光瑞に接触しており、光瑞の人材育成の理念が語られる。その後、金沢の四高を経て東京帝国大学印度哲学科に進み、大正10年（1921）卒業。前田慧雲に師事し大学院にて『法華義疏』研究を勧められ、本格的に学問の道が開かれていくことになる。そして、この年に勤められた法隆寺における聖徳太子1300回大遠忌の経緯について言及する。当時の関係者から直接聞き及んでおり、多くの「大物」の名が出る。

昨今注目される財界の中心人物渋沢栄一を担ぎ出し、水戸学修得の渋沢に、法隆寺管長や黒板勝美、高嶋米峰らが太子の功績を納得させ、この事業が動き出す。そして、久邇宮邦彦王を総裁に、官・軍・財界や研究者・芸術家らをあげてこの法要が成就したという。明治維新以来の仏教後退の風潮に反し、国家プロジェクト的法要へと展開させようとした、当時の法隆寺関係者や研究者らのこうした気運は、ほとんど記録されていないのではなかろうか。

また、花山は大正13年（1924）大学院退学とともに、本派本願寺海外研究生としてヨーロッパ留学（英・独・仏）を命ぜられた。2年間渡航した帰途にインドの仏跡も踏査した。帰国後、先の聖徳太子大遠忌法要の余剰金で聖徳太子奉讃会が設立され、花山は第1回目の研究生に推挙された。ここに、彼の研究課題は明確となり本格的に『法華義疏』の研究に取り組み、昭和3年（1928）暮れに聖徳太子奉讃会評議会にてその成果を報告した。総理以下各大臣、各宗管長、東大・京大総長、財界代表が揃い、久邇宮元帥の前で報告したという。

やがて、この成果が東北大学から東大に戻った宇井伯寿の耳に入り、岩波茂雄を介して岩波文庫から出版という運びとなった。岩波茂雄の文庫に対する深い思い入れも語られている。さらに、昭和8年（1933）には、岩崎男爵（弥太郎）設立の東洋文庫からも出版された。それにより、昭和10年（1935）36歳の若さで帝国学士院恩賜賞を受賞している。受賞時のエピソードも興味深い。このとき天皇の代理として出席した高松宮（昭和天皇弟）の計らいで、その後宮中において『法華義疏』の原本を見る機会を与えられた。初めて実見したときの感慨も鮮明に語られている。次いで、『勝鬘經義疏の研究』で文学博士の学位を取得している。やがて太平洋戦争が始まり家族共々疎開したが、苦勞の末に終戦直前に第四子（娘）を亡くす。

以上のような内容が前半（一部後半）で語られており、後半では第二、第三の点について主に語られている。

終戦の翌日から『勝鬘經義疏』の訳出をし、武力で滅びた日本を文化国家・平和国家として育てるべく責務を感じたという。そして、これを岩波文庫から出すべく岩波茂雄に掛け合うが、紙不足により3年後の昭和23年（1948）ざら紙でようやく出版された。この序文に、花山の国家再建の責務と意志が表現されている。これを聴衆にかみ砕いて語っている。

また、『勝鬘經義疏』研究と並行して、巣鴨プリズンに収容された戦犯容疑者・受刑者に対する教誨師の話が持ち上がる。明治以来、仏教は政治から切り離された。戦後、マッカー

サーも政治と宗教について手を焼いていることを側聞した花山は、昭和12年（1937）の応召で即日帰郷となった負い目も心底にあり、これに応ずることにした。「武力のなくなった今後の日本国が、世界に向かって御恩返しするのは仏法しかない。それが自分の使命である。」との信念であった。インド以来の仏法は滅ぶか小乗となって南方に残るが、日本に育った大乘一乗の仏法は聖徳太子以来日本に残った。これを巢鴨に捧げる決意を吐露している。何故、花山が巢鴨に向かったかという点については、従来ほとんど知られておらず、ここにその真意が語られている点は貴重である。

花山が巢鴨プリズンで東条英機と土肥原賢次について語った内容は、別の録音をもとにCD付きで書籍化している（『A級戦犯者の遺言—教誨師花山信勝が聞いたお念仏』、法蔵館、2019年）。詳細はこちらを参照されたいが、そこにも語られていないようなエピソードが本録音には語られている。

戦争で聖徳太子奉讃会がなくなったが、昭和26年（1951）に法隆寺夏季大学を立ち上げている。奉讃会で育てられた石田茂作・坂本太郎・大岡実と花山の四人は、毎年7月に法隆寺で希望者を対象に講義した。まさに彼らが手弁当で戦後の法隆寺・聖徳太子復興に尽力したもので、その30回目の花山の講演が『回顧六十年』の講題であった。

第三は、東京大学退官後に本願寺宗門による北米開教総長に任じられた点であるが、これは最終部分で少し述べられるのみである。しかし、この決断にも重いものが語られる。先の特異な体験者であった花山は、国内全域で仏縁を得た上は、アメリカやカナダの人々にも伝えるべき意義ありとした。太子の時代に鑑真和上が来日し盲目になったことを引き合いに、彼の地で骨を埋める覚悟で御恩返しができればというものであった。伝道と並行して、彼の地で『国訳一切経』収載のための『維摩経義疏』を加えた『三経義疏』全体の訳と解説の原稿を日本へ送っている。さらに、昭和44年（1969）に帰国後も、『勝鬘経義疏』の敦煌本対比の推敲や『維摩経義疏』の再訳の出版など、生涯を通じ80歳を超えても精力的に『三経義疏』の太子真撰を裏付ける作業を続けたことが語られ、締め括られている。

一方で、こうした学問世界の事柄まで、このときの一般聴衆は最後まで聞き続けたことに驚かされる。

このように花山の研究は、一貫して太子と『三経義疏』の追究に象徴される。その姿勢は、仏教に対する崇敬と謝念に起因していることが講話の端々から窺われる。そして、巢鴨プリズンでの特異な任務も、北米での10年に及ぶ開教任務も、その延長上にあったことが知らされる。その意味で、第一に仏教者として、自身の学問大系が構築されたように思われる。そこには、大谷光瑞はじめ、仏縁による幾多の教導・支援に恵まれたことが大きな背景となっていたようである。

また花山は、戦争を挟み社会状況や価値観が相対する二つの時代を生きた研究者である。戦前の研究についての評価は分かれるが、若き日に受賞した恩賜賞や、高松宮の配慮による

宮中での『法華義疏』原本の実見などの栄誉は、彼の以後の研究の礎になったことは確かである。そして、戦争の負の部分を超えるべく、戦後は「平和」に軸足を置いた研究や活動に専念したように思われる。

最初にもふれたが、聖徳太子周辺の研究は戦後大きく進展し、花山の太子真撰説は否定的となった。しかし、ここに語られる二つの時代にわたる研究成果とその姿勢、そして様々な実績や体験にもとづく逸話などは、個人的回顧談の領域を超える貴重な内容も含まれている。近代仏教史研究の一助になれば幸いである。

なお本録音は、名古屋テレビ制作「テレメンタリー『僧と戦犯』」(2021年2月テレビ朝日系全国放映)に使用するため、名古屋テレビ報道局記者・菅原竜太氏が多くを文字に起こした。ただ、専門用語が多用され不完全であったため、改めて青木が修正を加えたものである。テレビ放映の機会がなければ、このような形にならなかったことを記し、菅原氏の労に謝意を表したい。

追記：録音テープという性質上、聞き取り難い部分もあることをお断りしておきたい。また、現今では不適切と思われる言辞もあるが、録音起このまま表記した。聞き取れない箇所は〔 〕で示した。人名等について、特定できないものについて片仮名で示したものがある。

また、参考文献として増山太郎編著『聖徳太子奉讃会史』(2010・10・永青文庫、非売品)がある。同書と花山の口述には若干の相違点が見られる。

花山信勝 回顧60年

「三婦依文」唱和（お念仏の声）

一昨日まではずいぶん暑かったのが、夕べからにわかには、大きな雨が降って、なかなか出ましくい皆様方がご遠方からもわざわざこうして朝早くから、お出ましていただきまして、この蓮成寺さんにお参りいただいたことを本当に皆様とともにありがたくお礼を申し上げる次第であります。

実は、昨晚からこちらさまにしまっており、長い間のいろいろな先生方のご法話においてになった、その講義の題目であるとか、お名前を拝見させていただいておりましたところ、その最初のころに、ちょうど24年、昭和24年（1949）、いまから31年前であります、
二 24年の3月の31日に、わたしがこちらに初めてまいりまして、そのときには現在、金沢にわたたくしの後の住職をするように、この5月に譲りました長男の勝道（しょうどう）が同道してこちらさまに上がりまして、亡くなられた先住さま、また現在の青木先生と一緒に、玄関の前で、写真を撮らせていただいたお写真がありましたのを見て、31年前を思いだし懐かし

く存じた次第であります、そのときに、わたくしがこの寺でお話を申し上げたことが東条大将、土肥原大将、廣田総理大臣、こういう方々のいわゆるA級の、巢鴨のプリズンで立派に亡くなっていかれました方々のことを中心に、お話し申し上げるといふ記録が残っておりまして、今から31年前を思い出しながら、ずっと生きていきますと、たびたび、こちらの皆様方にお目にかかるご因縁を頂戴いたした記録が残っておりまして、ある年には7月25日に、こちらに上がって、お話し申し上げたこともあったようでございまして、今年、昭和55年7月26日から4日間、奈良の法隆寺おきまして、法隆寺の夏季大学のその講習を初めて30回目になりますので、明日（みょうにち）法隆寺に出かける予定にしておりますが、青木先生から早いころにお手紙頂戴いたしまして、この度法隆寺へ行く前か後に1日こちらにご因縁を頂戴したいという親切なお手紙を頂戴いたしまして、実は歳を相当とりまして、体の具合がどうなるか分かりませんが特に今年の2月から3月、4月と、約3か月ばかり風邪をひいたのが原因で、ずっとベッドに休んでおりました。これで最後かと思っておったのが、まあ、仏様のお力をいただいて、おそらく法隆寺の30回目の夏期講習会にも行けるようにさせていただいたので、それではその前の日あるいは後の日、どちらでも参りますからというご返事を差上げましたところ、ちょうど今日がこのお寺様の、虫干（法要）の日にもあたるから、この24日に来てもらいたいという、お手紙を頂戴いたしまして、そこで昨晚恐ろしい雷なり、暴風雨なり、わたし82歳になるのに初めての強い風にこの安城の駅で降りたときにあいまして、たまたま雷もあちらこちらに光っておりまして、まあ、雷にあつて、死んでいった人もときどき新聞に出ておりますので、精進をしなければと思って、駅のプラットホームで時間待ちをしておったのですが、幸いに雨も静かになって昨晚こちらさまにお迎えをいただきまして、きょうはこうして、お出にくいところを皆様たちに、大勢おいでくださいまして、ご因縁を結ばせていただきましたことを、ありがたく感謝申し上げる次第でございます。

奈良の法隆寺では、先ほども申したようにちょうど30回目になる夏季大学を、開いてから30回目になるから、何か記念の印刷をしたい、また今年の夏季大学の題目もなんとという題目にしたらいいかという、こういうお尋ねがございましたので、聖徳太子の1300年の御忌、これが法隆寺でつとまったのが、ちょうど59年の昔。来年は60年になるのであります。聖徳太子が亡くなられて、1360年になるのであります、そこでわたくしが聖徳太子の御書物に親しましていただいてから60年になりますので、60年を回顧する、思い出すという題目で、「回顧60年」という題目によって、簡単な思い出のことを書いて、送っておいて、あさってからその60年の間のいろいろの思い出を1時間15、6分の間に法隆寺でお話する予定にしております。そこでこちらさまにご因縁をいただいて、31年になります、きょうのお話のこの題目も法隆寺と同じ題目にさせていただいてきました。60年を回顧する、思い出す。回顧60年という題目で、わたくしの60年間におけるいろいろの出来事を思い出、そういったことを時間の許します限り、法隆寺では1時間と15分か20分ですが、こちらでは午前、午後にか

て、3時間半になるか、4時間になるか、その時間において、何かお話し申しあげたい。こういうことで、昨晚、着いてから考えさせてもらって、今までそういう題目でどういうことを申し上げようかなと思ってメモを作っておったのでございますが、わたくしが聖徳太子様にお目にかかったのは小さい時分でありまして、ここに太子さまの親御様の用明天皇に、えー、夜も昼も休まず二十五条の袈裟をかけて、手に柄香炉をもって、御父君用明天皇様のご病気が何とかして早く治りますように。太子様が真心を込めて、心身ともにお父様御父君のご病気の早くお治りになるのを念じられた孝養の御影、親孝行、孝養の御影という、太子様の像が懸っておりますので、えーお西であろうと東であろうと、専修寺派であろうと親鸞聖人の御教えのもとに、いろいろと尊い、仏法を広めておられます全国のお寺には必ず孝養の御影を懸けておるのでございます。

わたくしも小さい時分から、お目にかかってきたわけでございますが、本当に太子様の、立派な方であるということについて、まあ学問的に勉強をさせてもらったのが大正10年(1921)、今から約60年の昔でございます。その年というのはちょうど聖徳太子様の1300年のご法事、御遠忌が奈良の法隆寺を始めてとして全国のそれぞれのご因縁のお寺で設けられたので、来年が1360年の御忌にあたるのであります。ちょうど大正10年の春の3月に、わたくしが東京の帝国大学、いまは東京大学と名前が変わっておりますが、東京帝国大学のインド哲学、仏教を主として学ぶインド哲学科を卒業したのが、満22歳の春であったのでございます。大学を卒業いたしまして、そのまま大学院に残ったのであります。そのときに、東京大学で前田慧雲(えうん)という先生、この四日市であります。この近くでお生まれになった前田慧雲先生が、聖徳太子の『法華義疏』、聖徳太子がおつくりになった『法華義疏』について、えー、ご講義を始められた。大学を卒業して、大学院の学生の時にその太子様の御書物というものにお親しみをいただいた始まりでございますが、若いころのわたくし、またその時代、そして今でも聖徳太子が書かれたのではないだろう、おそらく太子様以外の方によるものに相違ないという、そんなことが一般に言われておりますが、私もそのつもりで、おそらく、聖徳太子はえらい方だけでも、こういうものを実際にお書きになったのかどうか、というような疑いの心を持ちながら、前田先生のずっと講義を聞いておったのでございます。

ところがその年の暮れに、徴兵検査を受けましたところ、乙種、第一乙種として合格ということになって、当時は大学で勉強した人たちが28になるまで徴兵猶予があったのでございますが、ちょうどその年に、この制度がなくなりまして、大学で勉強中は徴兵は猶予するが、大学を卒業した者はそのまま徴兵検査を受けねばならないということになって、28まで私は6年間あるから、大学院で勉強したいと思ったときに徴兵検査「まさか(軍隊に)とられるわけではなからう。私のような弱々しい体のものが。」と思いましたが、生まれた場所の金沢の検査場まで行って調べてもらったのが、「甲種」ではない「乙種」である。けれども「第一乙種」だということで万が一、そのまま籍を置くと、3年間兵隊さんになって、3年間兵

隊をやらねばならん。これでは大変だということで、「1年志願」というものがございまして、1年間だけ、徴兵に応じて、兵隊さんのことを習うという、「1年志願」というものをしまして、金沢の砲兵隊に入ったのでございます。

まあ一生懸命やったおかげで、無事1年間を終わったのでございますが、その当時は4か月徴兵の制度の中でさらに勉強しなければ、少尉にはなれないということでありましたから、私たちの入っておった「特科幹(?)」砲兵とか騎兵とか輜重兵とか、こういうところは1年終わったら一度出てそうして、4か月経ってさらにまた4か月後に出る、という制度でありましたので、私は1年間だけ真面目に勤めて、軍曹で出たのであります。さらに4か月勉強すれば少尉にはなれたのでございますが、たまたま、出てきたときに、本願寺のほうから、海外に留学をなさい。ということになりまして、海外に留学するというと、「兵隊のほうは4か月はいられないがどうしましょう。」と陸軍省に行って相談をしたところ、「行ってもよろしい、行ってもいいが、少尉になる資格を捨てることになる。」初めから軍人になる気持ちが無いので、当時の徴兵制度に準じて試験を受けたら、たまたま第一乙種として合格したから、砲兵隊に入営したのでございますが、軍曹として出てから、それならば、アメリカではなくして、イギリス、英国、ドイツ、フランス、などヨーロッパに勉強するのに本願寺から命ぜられたんです。

それで、軍人になることを捨てて、45日かかって、横浜を出てフランスのマルセイユに着いて、そこからパリからイギリスのロンドンに渡った。今のように飛行機で簡単に行ける時代ではなかったので日本からヨーロッパ行くのには、40数日かかったのでございます。で、それを2年間イギリス・ドイツ・フランス等で勉強いたしまして、帰り道にインドに上陸して、お釈迦様の仏跡をあちらこちらお参りして、最近ではインド行かれる方々がいろいろな団体で、飛行機で簡単に1週間や2週間で行ける制度になっておりますが、その当時は飛行機はもちろん、自動車も十分インドにはないということで、インドのあちらこちら仏跡を参拝させていただいて、実地を調査して、日本に帰ったのが大正15年(1926)の春であったのであります。ところが、その年の秋になりまして、聖徳太子奉賛会という日本全体の立派な会ができておりまして、これは聖徳太子様の1300年の御忌を立派に勤めるために法隆寺の亡くなられた定胤(じょういん)管長がいろいろと奔走されまして、東京なり京都なりそれぞれの大学に先生だけでなく、あるいは経済界の主な人たち、あるいは政治家、軍人の世界というような、あるいは日本を挙げてのまた芸術家、そういったようなものを総合した聖徳太子の1300年の御忌を立派に勤めるための会が、聖徳太子1300年御忌奉賛会というもので出来上がったのでありまして、えー、これを作るためになんとか会長さんになっていただきたいということで、奈良の法隆寺の定胤管長様なり、あるいは東京大学の歴史の日本史の専門であった黒板勝美(くろいた・かつみ)先生なり、あるいは岡倉天心さんの後に日本のこの、美術学校というのは芸術大学になっておりますが、その校長さんだった正木先生(正木直彦カ)

なり、あるいは高嶋米峰（たかしま・べいほう）先生だったり、こういう方々が一緒になって、この当時の日本の財界の第一人者であった渋沢栄一男爵のところに参って、「どうか聖徳太子様の1300年の御忌を立派に勤めたい。あなたにひとつ、会長さんになっていただきたい。」と頼みに行かれたところ、静かにこれを聞いておられた渋沢さんが口を開いておっしゃるのは、「聖徳太子という方は、蘇我馬子と一緒に、崇峻天皇を弑逆したてまつったのも、そのあとも馬子と一緒に政治をした人だから、どうもそういう太子様のご法事をするための会長さんにはとてもできません。」とお断りになられた。そのとき訪ねて行かれた黑板先生なり、正木さんなり、高嶋米峰さんなりは熱心に、「太子様はそのような方ではなかった」ので、「太子様がすべての日本の文化をお知らせくださった、文化の元祖であり、また、日本のこの仏法というものは初めて日本にという下さった方だから」というて、太子様のことを間違っって伝わっておったことを滾々と1時間半にわたって、ご説明されたところ、渋沢さんは静かに聞いておられて、「まことに申し訳ございませんでした。わたくしは今まで水戸藩の大日本史を編纂した人たちの記録をもとにして、太子様のことを勉強させてもらっていた。これは間違いだった。こう気が付いた以上は、どうかわたくしをあなた方の聖徳太子1300年の御遠忌を法隆寺でつとめられる、副会長にさせていただきたい。」副会長というて、渋沢さんはおっしゃった。そのときに、訪ねていった法隆寺の管長さんだったりとか、あるいは黑板先生とか、高嶋先生とかが「あなたが副会長になってもらうというて会長さんのなり手がありません。」と申したところ、渋沢さんは「それは私に任せてください。」渋沢さんにお任せして帰ったところ、渋沢さんがあちらこちらにご奔走なさりまして、紀州の殿様であられた徳川らいいりん（頼倫・「よりみち」）侯爵をどうか1300年の御忌を務める会長さんになっていただきたいとお願いしたところ、ともかくこの、明治の初めに、仏法というものはこれはいらない。日本の神様があるわけなんで、仏法というのはよそから、外国やインドから入ってきたものだから、いらないんだ。こういうものを日本にはじめられた太子様ならば、しかも蘇我馬子と政治をした太子様ならば、我々は拝む必要がないとなっておったものを、徳川らいいりん（頼倫）さんもやはり神道系統、いろいろ、各家のお世話をしている、徳川家の、えー、関係の方々のご意見があまり芳しくない。それをいろいろ、太子様のお言葉をご説明申し上げて、とうとう、らいいりん（頼倫）さんが会長になられた。

ところが、らいいりん（頼倫）さんはそれからまもなく、亡くなられていくんで、そのあとに、会長さんになったのが熊本の殿様細川ごりゅう（ほそかわ・護立「もりたつ」侯爵）さんという方が、聖徳太子奉賛会の会長さんになられた。そうして、さらに、聖徳太子の御忌をつとめ、ためにということで、今の皇后陛下（後の香淳皇后）のおん父君であられた、亡くなられた久邇元帥のくにひこ（邦彦・「くによし」）殿下、この方を総裁にお願いして、ようやく日本あげて、大きな聖徳太子様の1300年の御忌を務める会が出来上がった（註：巻末）。政府の総理大臣や各大臣はいうまでもなく顧問となり、陸軍の大將たちも海軍の大將

たちも全部、関係をして、そして芸術界では横山大観とか、川合玉堂とか、京都・東京日本中の画家たちも、今までは芸術界も気にしない、分別しておったのが、一つにまとまって、聖徳太子様の1300年の御忌を堂々と法隆寺で勤める会が出来上がった。政府の役人も財界の人たちも芸術界の人たちも、学者たちも東京大学も京都大学の先生たちも、それから、陸海軍の大將たちはじめ、宗教界の各管長さんたちも、各界があげて、太子様の1300年の御忌を立派にお勤めになったのでございまして、その会が出来上がったから、法隆寺で御遠忌が勤まってからあとその会の用事がなくなったが、全国的に出来上がった会だから、たくさんのお金が余った。余ったお金でこれからあと、太子様の本当のことを日本中の人たちに知らせねばならないということで、財団法人となって「聖徳太子奉賛会」となって、「聖徳太子1300年御忌奉讃」というのはなくなって、「聖徳太子奉賛会」というものが出来上がった。

聖徳太子奉賛会がその後、太子様のご精神の実際を日本中の師範学校でお話することになる。聖徳太子奉賛会で、これから太子様の勉強をする若い先生を育てるということ。また、太子様の関係のいろいろの立派なものを書物として出すということ。そういうような事柄が中心となって、東京では毎年太子様のご法事を4月11日、本当は2月22日だけれども、これは陰暦でお月様の暦のこよみで2月22日、明治から太陽暦になりましたから、4月の11日という日を毎年、東京の美術学校、今の芸術大学の講堂で、元帥の皆様も、殿下をはじめ会長様ご夫妻、いろんな方々から諸大臣、いろいろな各宗の管長さんたちが集まって、奈良の法隆寺の管長様も大勢のお弟子さんを引き連れて、東京に出かけられて、太子様のご法要が毎年勤まってきたのでありますが、戦後は学校で宗教教育をしてはならん、宗教行事もしてはならん、ということになって現在は、今の芸術大学で太子様の奉賛のご法要をするのをやめて、今は毎年上野博物館、国立博物館の中に、「法隆寺館」という法隆寺から明治天皇様に献上された色々の尊いものが、それが宮中から帝室博物館だったから、東京の上野博物館にうつされた。それだけを陳列する「法隆寺館」というものが出来上がった。そこでご法要を毎年勤めておるのでございます。

ところが久邇宮元帥の妃殿下（倪子・ちかこ）は、今の皇后さまのお母さまでありますが、この方も毎年ご法要におまいりになっておられたが、まだ今の皇后さまが宮中にお入りになる前であったと思う、「良子（ながこ）女王殿下」と申し上げておった。このときに、いろいろ世間ではまあ、それに対して「良子女王には色盲があるから」というようなことで、なんとかほかから後の皇后になる方という運動もあった時代でございまして、久邇宮様、妃殿下、良子女王方々が奈良の法隆寺へお参りになって聖徳太子様の御前で拝礼をされて、お手植の松をお植えになったものが今でも残っておりますが、この当時、久邇宮様の妃殿下が、立派に聖徳太子の十七条の憲法をお書きになりました。これを法隆寺へお納めになった。現物は法隆寺にしまっておるようですが、それを写真版にして、定胤殿下が色々因縁の深いところに寄贈されたものが、わたくしの金沢の聖徳堂にも、それをいま陳列してありますが、

実におなごで、これだけ立派な漢文を十七条の憲法をお書きになることはなかなか珍しいという立派な字で書いてありますが、最後のところに、太子様に向かって、いろいろの感謝とお願いの記録が書いてあるのでありますが、そのあとは良子女王は立派に宮中にお入りになった。そうして、いまも、天皇様のお相手となって、立派に日本の政治が平和に行われるように、ご内助あらせられたと思いますが、この良子女王殿下が宮中にお入りになりますときにお持ちになったのが、太子の二才像の小さなお像で、りっぱなお厨子の中に入れて、宮中に持っただけでおいでになった。これは久邇宮家において、先ほど申し上げましたように、お父様もお母様も聖徳太子奉賛の総裁におなりになって、太子様の信仰が強かった。女王殿下も、この二才の聖徳太子様をお厨子に入れて、宮中へお入りになった。

明治以後、ともかく100年近く宮中に昔からありました仏像関係、仏教関係のものは明治維新で全部廃仏毀釈で宮中から外に出てしまった。京都の、この泉涌寺に大部来ておりますが、久邇宮様の良子女王殿下が宮中にお入りになられたときに、太子様の像を大事にしてお入りになったということ、これは大変ありがたいことだと思うんですが、えー、わたくしが、ほうせいはい(?) 1年間、それから出てきてからヨーロッパに留学して、2年間、帰ってきたのが大正15年の春であったんで、その年、大正15年の秋に、聖徳太子奉賛会から、日本中の大学に宛てて、公立私立の大学に宛てて、聖徳太子を研究する研究員を募集された。あちらこちらから推薦があったようですが、私が外国から帰ってきてから、その年でありまして、たまたま古在(こざい)総長、東大の、古在総長のご推薦をいただいて、そしてそれが通過して、聖徳太子奉賛会の最初の第一回の研究員というものに見出されて、それから、私は聖徳太子の勉強を真剣にはじめなければならなくなった。

たまたま、その年の暮れの11月に、天皇様のお手元に明治10年(1877)に、奈良の法隆寺からいろいろと尊いもの、廃仏毀釈でだんだんとどこへ散らばっていったか分からんような時代、これだけは天皇様のところに差し上げたいということで、おおさめになったものが、たくさんある。四十八体の仏様だとか、あるいは雅楽の面だとか、今1万円紙幣だ、5000円紙幣だ、その前は1000円紙幣だ、100円紙幣だと太子様のお姿が、お顔が出ていますが、あの、原本。阿佐太子のお書きになったと称される唐本御影^{みかげ}。この太子様の右と左にいる小さなお子さん、山背大兄王だろうと言われていますが、右左に侍っておられ、真ん中に太子様がいらっしゃる唐本御影というもの、この肖像画、日本で初めての肖像画、奈良時代だとなっていますが、太子様の肖像画、これに太子様がお書きになったと称せられる『法華義疏』4巻、これは聖徳太子がお書きになったとすれば、日本で初めて文字として、紙の上にお書きになった書物で、当時まだ日本には万葉仮名という、漢字からだんだんだんだん崩していった楷書から、行書・草書を、さらに、万葉仮名というようなものになって、万葉集の時代に作られた万葉仮名、それからそのあとに「いろはにほへとちりぬるを」という伊呂波仮名。さらにそのあとに、「アイウエオカキクケコ」という片仮名、こういうものが日本で考え出されて、現在

の日本の文字として使われておるイロハと、あいうえおの五十音は、いまでもつかってあるのでございまして、そういったようなものが、まだ日本で、考え出されていない時代に、聖徳太子の時代は日本の文字はなかった。発音はあったけど、文字はなかった。そこで中国のシナの漢字だけが習われておったので、聖徳太子がその漢字で、全部初めからおしまいで漢字で法華経と、勝鬘経と、維摩経という3つのお経に注釈をお書きになった。もちろん、送り仮名もなければ、返り点もついていない。その勝鬘経の注釈と、維摩経の注釈は奈良時代に、太子様がお書きになったものがどうなったのか、なくなった。『法華義疏』だけは伝わった。奈良の法隆寺にあった。非常に大事に法隆寺のお倉の中にしまっていたので、法隆寺のご住職ご自身もなかなか拝めなかった時代であった。だから、鎌倉時代に、たまたま親鸞聖人とか、道元禅師とか、日蓮上人とか、いろいろ法隆寺にお参りになった、のちの各宗派のご開山たち。こういった方々も実物を見ていなかった。伝教大師だろうと、弘法大師だろうと、そういった方々も法隆寺へお見えになったが実際は見えておられない。

大事にしまってきたものが明治の初め、明治10年のころに、太子様のお像、あるいは四十八体の仏様が一緒になって宮中に納まった。明治10年と申しますんで、この鹿児島あの戦争、西郷隆盛と官軍との戦争があった当時でありますから、明治天皇がそれをお納めになって、奈良の法隆寺が雨漏りがする、あちらこちらに腐っていった、修繕するお金もない。太子様以来、法隆寺は太子様のおかげで今日まで千何百年持ちこたえてきたが、廃仏毀釈によってお寺という姿だけは残るけれども維持していく経費がないということで、明治天皇様はお手元金の1万円だったか2万円だったかを相当に、法隆寺にご下賜になった。そのお金が基になって、その利息でとにかく法隆寺の修繕を行った。いろいろなさせて、ようやく奈良の法隆寺は今日まで伝わるようになったのでありますが、その法隆寺をもう少し立派な完全なものにしたいというのが、定胤陛下が一生懸命になって、ご奔走されて太子様の1300年の御忌を大正10年に立派にお勤めになる。それがだんだん、法隆寺が世の中に知られ、今日では全国からバスで法隆寺にお参りになるくらい、にぎやかな国民として知らない者がなくらい親しいものになる。世界中あれだけさんの国宝建築だとか、その他いろいろ国宝が、各時代に渡る国宝が集まっているのが法隆寺だけなのです。

でこちらさまからも法隆寺夏期大学が始まった今から31年昔から、大勢の方々が青木先生に連れられて、団体でご参詣になって、そして、夏期大学にお入りになった方々も非常に多かったと思います。わたくしがこちらからご因縁をいただくようになったのも、そういった方々の結びつきがございまして、たびたびこちら様にお招きいただきまして、皆様にお話し上げる機会ができたのでございまして、ともかく、わたくしが、ヨーロッパから戻ってきて、その年の秋になって、初めての研究員に選ばれた。これから日本の仏法を真剣に勉強しよう。今までヨーロッパでは日本の仏教の、勉強もできなかったが、ともかく今までイギリスの学者、フランスの学者、ドイツの学者、ソビエト・ロシアの学者、その時は帝政ロシア

でした、それからオランダの学者、イタリアの学者を始め、日本の明治以来の学者たちが書いたヨーロッパの言葉、英語、フランス語、ドイツ語、イタリア語、ロシア語等で書いた仏教に関する書物だとか、仏教に関する論文だとか、そういうものがどれだけできるだろうかということ、私はイギリス・フランス・ドイツ等の大学で調べて帰ってきた。約200年間にわたって、西洋の学者また日本の学者が横文字で世の中に表した書物や論文の中に、どんなものがあるかということ、カードにとって日本に帰ってきたが、それからは聖徳太子奉賛会の第1回目の研究員とさせていただいて、東京大学からも「日本の仏教を勉強するように」という特別研究員というものに選ばれて、その年たまたま大正15年（1925）の11月に、法隆寺から昔明治天皇のところに献上された『法華義疏』。聖徳太子ご自身がお書きになったと言ひ伝えられたという『法華義疏』を、このコロタイプ版で、この複製で、世間にいくらか、公に分布されるようなことが、聖徳太子奉賛会の第1回の出版事業として計画された。これが世の中に出た。

当時、明治天皇がご在職中は、天皇様のご座所の椅子のある後ろの棚に、大事にそれがしまっていた。したがって、臣下の者は誰一人としてそういうものがあることも知らず、手に触れることもできなかったものが、大正天皇になられてから、太子様の1300年の御忌が執り行われるということから、宮中に納まったものが博物館で展示されるということがあった。大勢の学者、先生たちも初めて見たもので、「不思議だ不思議だ。文字の形といい、紙の古さといい、内容は細かく勉強できないが、どうやら奈良時代のたくさんな写経とは違うし、太子様のものかどうか、太子様のものだろう。」というような議論が学会では行われていたのでありますが、これが初めて聖徳太子奉賛会のおかげで、宮中において、何部かだけを印刷して、そのまま同じ姿で印刷しているんな方が見た。私は日本の仏教を勉強するためには、とにかく、伝教大師とか、弘法大師とか、あるいは法然上人とか、親鸞聖人とか、道元禪師や〔 〕上人とか、えらいお坊さんが出ておられるけれども、こういうものをご覧になったかどうか、たまたまそれが初めて、現代の新しい印刷技術で、その通りのものが複製されて世に出る。これから勉強しよう、日本の仏法の始まりは、ここから始まるに違いないと考え、勉強しました。まさかそれから、太子様がお書きになったかどうか、疑いながら勉強させていただいたら、どうもこの書物はこれを作った自身が書いたものでなければならぬ。字を消したり、書き直したり、あるいは消したところが破れたら、また紙を貼って、書き込んだ。あるいは字の右上に小さく書いてあった。いろいろ苦心惨憺してある跡を、ずっと調べていくというと、どうもこれは太子様がおつくりになったと昔から、言ひ伝えられていること以外、結論の持っていく場所がない。中に書いてあることは実に立派なことが書いてある。また、なかには、極めて幼稚など申しますか、仏教を勉強をした者には、ここはこうでなければならぬのに、どうしてこうなっているのか、といったこともある。

太子様の時代は仏法というものが、朝鮮を経て、新羅の国、高麗の国、百済の国を経て日

本にやってきた。それから仏教の勉強を始められたのですが、それでは足りない、太子様は初めて日本から小野妹子という人を大使に、直接中国、シナの本土にまで参考にする書物をとってこい。日本ではまだ紙を作る技術も知らない。また、そういう紙が必要じゃなかった。書物として残すためには紙はなくてはならない。もちろん筆とか硯とか墨とか必要だ。太子様のご命令を受けて、小野妹子が隋の国まででかけていった。この時の記録が、中国の隋の歴史にのっている。有名な言葉、「日出ずる国の天子、日隠る国の天子に書をいたす。」日の出るところは東、日本の国。大日本、日ノ本、太陽が出るもとは、日本。中国から見れば東のほう。日出る処の天子が、日本の天子が、日隠る処の天子、太陽が沈んでいく西の天子、隋の煬帝に向かって手紙を出す、つつがなきや、お変わりございませんか。そうして日本からは20代前後の若いお坊さんなり、お医者さんになる人なり。あるいは土木建築のいろいろの文化を学ぶ、若い人たちが、小野妹子について行って勉強しに行った。中国で10年20年30年間とどまって、勉強していった人たちが帰ってきて、聖徳太子たちが亡くなられた後に立派な「大化の改新」という天皇様中心の日本が出来上がる。それが奈良の文化を中心とした日本の文化が始まっていくのですが、太子様が中国から取り寄せられた色々な参考書なり、そして紙なり筆なり硯なりによって、いま自分が講義をした推古天皇の御前において、あるいは勝鬘經の講義を申し上げた。まだ、法華經の講義も申し上げたが、講義を聞いた人は天皇様を始め、〔 〕があいた何人かの人たち。何とかしてこれを、世の中に、将来の日本に残さなければならない。お釈迦様がお書きになったことの中にも、序分がある。正宗分がある。正宗分というのは、お釈迦様が無くなられた後に、世の中がだんだんと濁っていく。末世になっていく。その頃には、このお経が残るように、大無量寿經とか、法華經とかが残って、大勢の人たちが頼りとする道を、光を求めながらやっていけるようにということで、太子様にご講義されたものをもとにして、いろいろ参考書を、色々参考にしてお書きになったものが太子様の『三經義疏』。3つのお経の注釈として8巻、今日伝わっておりますが、そのなかの『法華義疏』4巻だけが、幸いにも現代まで伝わって、1360年という時代は長い。その当時は今申しましたように、紙もなければ、筆も墨もなかった。必要がなかった。太子様が苦心惨憺して、中国の漢字だけで、このお経の注釈を書き残された実物を長い間法隆寺に伝わっておったのが、明治の始めに天皇様、明治天皇様に入り、今も京都の御所の中に大事にしまっている。天皇様の御物の大事なものとして、番号が第1号となっている。それが聖徳太子奉賛会によって、大正15年の末に、まず第1巻だけが見事に実物と同じような形で出版された。これを勉強する、勉強しなければとかがあったのが、これが私が真剣に太子様の義疏にお目にかかったはじまりであります。

以前に前田先生から、講義を聞いた時代もあるけれども、疑い半分、まさか太子様かと聞いておったんでありますが、実際の太子様ご自身がお書きになったと称せられるものが立派に世の中に出る。今から言えば……

(テープ中断)

その研究結果を2年間半ばかりかかっておったのを、聖徳太子奉賛会に提出した。ちょうどその年昭和3年(1928)であったと思いますが、昭和3年の暮れに、東京の上野の西洋館、その頃は西洋館くらいしかなかったので、えー、大勢の人たちが集まる。食事をする場所は今あるけど、(当時は)なかった。そこで聖徳太子奉賛会の評議員会が催されて、総理大臣や各大臣を始め、各宗の管長様、東大や京都大学の教授たち、芸術家の代表たち、お金持ちの財界の重鎮たち、というような人たちがいろいろ集まっていく中で、久邇宮元帥様の前に、わたくしが呼ばれて、宮様の前で御前報告を申し上げた。「これは太子様のご自筆である。間違いございません。」内容から勉強した。今までの人は見ただけで、不思議だ不思議だ。太子様のものだろう。なかではそうではないだろう。いろいろな学者先生の意見があったのですが、詳しく内容を勉強するということがなかった。ところが2年半ばかりかかって、私が研究員として勉強させてもらった結果、簡単に宮様の前でご報告申し上げたところ、元帥(宮様)も大変にお喜びになって、その後ろに立っておられた大谷尊由さん^{おおたにそんゆう}という方が、これは後に国務大臣になる、戦争中に亡くなられたが、満州で亡くなられたが、大谷尊由さんが見上げながら「早くこれを出版しなさい」って言って、皆さんに言うておられた。そういうわけで、大谷光瑞さんの弟さんですが、頭を掻きながら「はあ」といったのが今でも思い出せます。

そのままに、終わったのでありますが、ところが、前か後に、東京大学の教授であった木村泰賢先生が、亡くなられた。インド哲学科を背負って、そうして今後の仏教研究を背負っていく人が亡くなられてしまった。その代わりに、東北大学ができた時に、東北大学の先生になっていかれた宇井伯寿という先生が東京大学に戻ってこられた。始めは東京大学で講義をされていた講師として、私もそれを聞いたのですが、その宇井先生が、のちには文化勲章をもらわれた。泰賢先生ももらわれたが、宇井先生ももらわれた。宇井先生が仙台から、東京へ戻ってこられた時に、わたくしに「君は最近、聖徳太子の『法華義疏』の研究をしていると聞いたんだが、私に一度、それを見せてくれないだろうか。」何のためかわからんが、宇井先生それ見たいとおっしゃった。聖徳太子奉賛会からそれを貸し出して、宇井先生にお届けをしたところ、宇井先生がそれをご覧になって、「これはこのままにしておいてはよくない。もったいない。」おそらくそう考えたのでしょうか、岩波書店、岩波茂雄さんという日本で有名な本屋さん、この岩波茂雄さんと宇井先生は同年配で、第一高等学校では一緒だったらしい。岩波さんのところに、この『法華義疏』を岩波文庫にして出さないかという話だったらしい。それで岩波さんが『法華義疏』を日本語訳して和約をして国語訳して、文庫に出すから、僕に原稿を書いてみなさいということで、私が『法華義疏』を岩波文庫に出すように、それから努力して持って行った。

ところが、当時の、お経関係の、仏教関係のものを岩波文庫に出すということは当時の世

間の常識からまるっきり外れていた。アネガキ？先生の日蓮上人のもの一冊と、和辻哲郎さんのもの1冊がでておっただけだった。あとは仏教関係のものはなかった。法華義疏がそのとき、岩波文庫にはじめて、採用されたのでありますが、何度も何度も校正をいたしました。細かいルビを入れて、そして、いろいろと番号を入れたりしたもんだから、第6校のときには、いくつかの文字を直すだけでいいんだから、というので、出張校正といまして、凸版印刷所のところに伺いまして、間違えたところをただしておった処、凸版印刷をやっている次長さんが私の姿を見て、「あなたのものですか、こういう厄介な面倒なものを作る人は相当年配の人かと思ったんですが、わたしもびっくりした。」と言われ、まだ私はまだ32の歳でしたから、若かったんでしょう。あなたのような若い人がこんな面倒なものをよくやったなと、こういうことだった。

ところが、その当時の岩波書店のご主人が岩波茂雄さんという方で、岩波書店を始めた人、のちに出版関係で文化勲章をもらわれた人が、私に言われたのは、「岩波書店ではできるだけ学問的な書物は出版したいと思う。けれども、文庫は、誰のものでも入れるということはしない。岩波新書は相当吟味をして原稿を採用してるが、文庫となると、これ永久的なものだから、よほど内容を吟味します。」字は小さいし、本の体裁も小さいが、そんなに岩波書店では命がけでやっているんだということを考えて、出来上がったときに、岩波書店の大番頭のツツミさんというおじいさんが、私が「すみませんでしたなあ、こんな厄介なものを文庫に作りまして。」といったところ、そのツツミさんという大番頭は「あなたのこの『法華義疏』のおかげで、岩波文庫全体の価値が上がりました。」とこう言われた。それまで岩波文庫に出とったものは、そうたくさん数はなかったんだけど、マルクス関係のもの、哲学関係のもの、文学関係物もあったが、あっさりしたものだったが、『法華義疏』は非常に込み入ったものだから、ご迷惑をかけたと思う。えー、謝ったところ、「これで岩波文庫全体の価値が上がった」と喜ばれた。私もびっくりした次第ではありますが、ところが、それが昭和6年上巻が出たのは昭和6年（1931）、それから下巻が出まして、それが昭和8年。

その頃奈良の法隆寺では、定胤猊下を中心として、その『法華義疏』のご講義が夏まで続いておったらしい。白井成允先生とか、フクシマ先生とかそういった方々が、その当時法隆寺で定胤猊下からで講義を聞いておられた方がいられましたが、そののちに私の宇井先生のところに持って行った『法華義疏の研究』という書物が、東洋文庫から出版されることになった。東洋文庫というのは岩崎男爵がおつくりになった、マックスミュラーという人たちの書いたタカス先生の先生だが（？）書物をみな、東京大学に買い込んで、それは岩崎さんがお金を出された。東京大学に入れておいたところ、大震災のために、東京大学の図書館にあったものが、燃えてしまった。そのために、岩崎男爵は「東大はだめだ、自分で図書館を作る。」というので、岩崎男爵の、日本一のお金持ちのお力によって、東洋文庫という中国・日本を中心とした立派な図書を一杯収めている。そして、できるだけ良いものを出版するというこ

とをされた。その東洋文庫で、私の『法華義疏の研究』が印刷されることになった。当時の本屋というものは、お金の儲かる書物は出すけれども、お金の儲からない書物は引き受けないという時代、今とは全然違う。東洋文庫は趣旨として、世間の本屋が出すことができないものだけを出す。そして、それぞれの外国・日本の大事な図書館に寄付する、あるいは特別専門の学者にそれを寄贈する。こういう趣旨でやっておられた東洋文庫のなかに、この『法華義疏の研究』がとりあげられて、出版されたのが昭和8年であったのであります。おそらくそれも宇井先生から永井先生に言葉があって、永井先生から東洋文庫の白鳥先生にお話があって、そこで採用されたのであろうと思う。これも、私の知らんところで全く先生方のお助けをいただいたのであると感謝しておるのですが、これが出たあくる年の昭和9年の春、東京大学の講師になるようにということになった。

それまではわたくしは東洋大学だとか、國學院大學だと、東京文理科大学だとか、日本大学だとか、あちらこちらで日本仏教の講義をしておったんでありますが、自分が出身の東京大学で講師になるようにという、寝耳に水のことの通知があったのが、この聖徳太子の『法華義疏』出版したあくる年の春だった。おそらくそれを認めてくださった先生方のおかげで東京大学の講師になったもんだと思いますが、私の母が大へん喜んでくれまして、しかしながらこの年の秋、母が急に亡くなりました。わたくしが小学校5年の時に、金沢のお寺に養子に来てくれた父が亡くなった。43で。したがって、私は小学5年以来、母の手で一つで育ったわけでありましたが、大谷光瑞上人の親鸞聖人の650回の御遠忌を本願寺で勤められた後、大谷光瑞上人は本願寺は大きい、日本全国に末寺もあるが、親鸞聖人から蓮如上人まで200年。蓮如上人が出られてからもう自分、大谷光瑞さんまでが450年経過しておる。真宗の伽藍は大きい、日本中にお寺が、末寺があるが、いうてみれば、その大きな伽藍の根元にはシロアリがいっぱいたかっている。いつ何時瓦解するかもわからん。自分の時に何とか真剣に宗教、仏教の改革をしなきゃならん。それには自分一人では中央アジアの探検や発掘はしてきたが、若い人間を子どもを育てて将来日本の仏教界を立て直しをする人間を作らねばならん。こういうことで、大谷光瑞さんのポケットマネーで神戸と大阪の真中にある六甲山という山のふもとに、大谷光瑞さんの別荘があった。二楽荘という「山を愛し水を愛する」というこの別荘のそばに、中学校をおつくりになる。日本中から小学校を卒業しただけの人の試験をして、この学校に入れた。大谷光瑞さん直々に、自分の思いのままの人間を作ろうと働いたのが、武庫中学という学校だった。そこで私は幸いに石川県で17人試験を受けたんですが、私だけが選ばれて運よく光瑞さんに引き取られたのでありますが、2年3年とポケットマネーでは養いきれない。食事から着物から靴から帽子から、すべての必需品の全部、光瑞さんのポケットマネーで、子どもたちをのちに300、400人ちかくを育て上げるのは大変なことだ。経済的に行き詰まりができて、光瑞さんの一代で、結局色々本願寺関係の株に手がついたということなんです、そういうことでやめなければいけないことになって、大谷光瑞さんは

法主の職を投げ出して、日本から海外に出かけた。上海や大連を中心に南方アジアの国々をヨーロッパの国々を絶えず回って歩いて、そして、日本文化、日本の将来のために、努力しておられたのでありますが、3年間でその学校が無くなった。

私はたまたまその学校に入れられてから、1年生から3年生へとりあげさせられた。幸い3年で終わったときには中学の5年生になるときだった。5年生の中学生はよその県立・私立の中学5年生には編入できないということで24人だけ私たちが京都で特別教育を受けた。この学校は24人だけしか卒業していない学校だった。はじめ中学の2年に入った人たちはよかった。1年に入った人たちはあっちこっちに行った。回されていた。私は幸いに、とりあげさせられたものだから、先の人とは一緒になっちゃったんだが、そういう関係で光瑞さんのお世話になり、私の寺は貧乏な寺だから、父がおりませんから、大学に進む余裕もなかった。金沢には第四高等学校というものがあつたから、あなたの家からは歩いて10分くらい、高等学校の試験を受けたらどうかという人もあつて、入れるか入れないか分からないが、中学の1年間、とりあげさせられたから十分な勉強もさせられておらん。一生懸命試験を受けたら、幸いにも金沢の高等学校に入ることができた。3年間はお寺の仕事をしながら、あるいは中学の生徒さんに英語を教えながら、高等学校を3年間出て、東京へ行くようになったのでありますが、その間、私の世話をしてくれたのが、これが私の母。私の母は最後まで、お寺にもりをして、寺の守りをしてくれておくれたんだけど、年を取ってだんだんと弱くなった。1人の母を金沢に残しておくわけにはいかないので、私の東京の仮住まいのところへ連れていくと言うて、ようやく母も納得してくれてあとを寺の留守番を色々な方をお願いして、母を連れて帰ったところが、東京大学の講師になった喜びを嘯みしめながら、その年の秋に母が突然亡くなった。

父を失い母を失い、私の姉と妹も私が若い時分に、亡くなっていった。金は？、私の姉が死ぬときに、「信ちゃん信ちゃん。」私は信勝、「信ちゃん」言うておつたが「私の命だけどうか、長生きしてください。」といて、死んでいった姉のことを今も思い出しますが、私が弱い体であります、こうして私一人が今日まで長生きさせていただいて、色々と尊いご因縁を頂戴いたすことになったのも、みんな、亡くなった人たちのおかげだと思つて感謝しておるのでございますが、ところがその一人の母が亡くなった。本当に三界孤独いう気持を味わつた。子どもは二人はその当時おつて、その三人目の生まれた後だった。その三人目の息子が生まれたんで、母はこの子のために、そのとき百円だつたと思うが、郵便局で出かけるときに、それだけの金は私がかつてどうにか融通しますから、郵便局に行っちゃいかんと言つてためておつたのが、突然亡くなった。一つの年であつたのですが、3人の男の子がおつたが、家内と3人と家族それぞれ今迄お世話になつた母が四十九で亡くなったと思うと、この人生というものの寂しさ、お経の中に「独生独死独去独来」一人で生まれて一人で死んでいく、誰一人道連れになつて死んでいくものはない、と書いてある通り。

母は一人で去っていった気持ちで、この気持ちを間に合わせたいなあとっておった時に、岩波書店に勤めておったオヤマさんという方が、こういう訳語の立派な本を出版した。代理として、何か先生にお願いしたいと思う。『往生要集』というものがあるそうだ。源信和尚のおつくりになった。イタリアではダンテの『神曲』というものがあるが、それに劣らぬ立派なものだと聞いているが、それを一つ出してくれないだろうかという話があって、母が亡くなって今までそれほど気が付かなかった多勢の方々の御恩、社会恩、お葬式にお詣りになった方々、ほんの線香1本をそなえていった方々をはじめ、お世話になった方々に何とか報いなければいかん。経済的にも十分な余裕はないし、それじゃあこの『往生要集』というものを勉強させてもらおう、これを出版しよう、香典返しに。ということで、『往生要集』のありったけの本を、今までの本をあちらこちらのお寺に訪ねながら、『原本校註漢和対照往生要集』という、大きな本を作った。その当時、昭和12年（1937）だから、今からもう40何年前であります。『往生要集』という本ができたのは定価を決定版として12円にお付けになった。おそらく戦争前に日本の書物では一番高い豪華版となったと思う。当時は12年、それを皆様に送って差し上げた。やれやれこれで母の一周忌までと思ったのが、仕事がそれに間に合わない、三周忌にも間に合わない。ようやく、昭和12年の8月になってできあがったので、そこで本願寺のご門主はじめ、皆さまたちにこれを差し上げて、やれやれと思った時に、その昭和12年の秋、赤紙が来た。

戦争は満州事変（「支那事変」の誤り）が始まったころだ。日本の国民としてこれは逃げることはできない。当然長い髪を、オールバックにしておった頭を赤紙を受けてから、丸坊主になった。うちには、三人の小さな男の子と、家内はひとりおなかの中にまだ持つておる。その中で出ていく。いよいよ覚悟を決めて出かけて、そうして、金沢の、昔の砲兵隊、そこへ行ったところ、「裸になれ。」そのときに呼び出された連中は裸になって検査を受けた。私の格好がそこに集まっている人たちの中で、よほどみすばらしい格好だった。足がヒョロヒョロで、胸は大きいけれども、「お前何の商売だ！」試験官がそういうと、「何の商売？」今まで聞いたことがない。「何のことですか。」「何の商売をしておる。」おそらく、金沢というところは箔を打つ人たちが多。座ったまんまで、朝から晩まで箔打って、そういうことをやっているのかぐらいに思って、試験官が考えたかも。「何の商売だ。」八百屋さんとか魚屋さんとかうどん屋さんとか、そういう人たちと裸になったものだから、何の商売かと。「先生をしています。」先生といえは小学校の先生ぐらいに思っている。その年はようやく東京大学の講師になったあくる年、そして、えー、その前の年は、昭和10年は恩賜賞を頂戴した。思いがけない天皇様の恩賜賞だ。國學院大學とか東洋大学とか九州大学の法文学部とか、日本大学だとかあちらこちらに仏教の講義をしておる、ということを試験官に申したところ、しばらく待っておれ。後回しになって、全部終わって、合格する人、不合格の人。全部終わって後回しになった中から、何人かいた中から私呼び出されて、そして、試験官のお医者さん

が胸を見て、そのお医者さんの上官がいて、となりに上等兵がいて、「きょうはどれだけ通るのか聞いてこい。」上等兵は受付に行つて、「80パーセント」私の耳に聞こえた。きょう呼び出した人の中で、80パーセントだけとればいいんだ。あとの20パーセントはどうでもいい。軍医は私の胸に手を置きながら、こういった。「どの道もお国に対する忠義だ。君も専門の道を一生懸命やれ。即日帰郷だ帰れ。」こういうことだった。

私は覚悟を決めて、家内と3人の子どもと、おなかにいる子どもを残して、死を覚悟して出かけに行つたのがそのまま帰れとそういわれた。ああ、さっそく上野の駅までわたくしを大勢の方々が見送ってくださった。「万歳万歳」と。その当時は自動車はない。トラックに乗って、ナガイマコト先生とか、高嶋米峰先生など大勢の方が集まって、上野駅まで見送ってくれた。恩賜賞をもらった先生までが招集される。いうことで、上野駅は大変だった。あのときは満州事変（「支那事変」の誤）の時、太平洋戦争大東亜戦争はなかった。事変と呼んでおった。ところが日清戦争や日露戦争の時には若い人からとっていったんだが、今回の戦争は長引く。長引く、世界まで戦争するということで、いよいよ年齢がギリギリの人たちからとっていき。40歳の人からとっていき。偶然にも私は40そこそこになろうとしておったときだったから、真っ先に呼び出される応召ということになったんだが、その軍医さんはどういう方であったか、もう分かりませんが、「お前の専門の道をやりなさい。どの道もお国に対する忠義なんだ。」

兵隊になろうと、お前のやっていることをやろうということを知り、「そうだ」と思って、そこから出て、そこにある小さな郵便局から、送ってくださった方々への電報を打って「即日帰郷となりました。」あの当時即日帰郷となった人たちは恥ずかしくて自分の村には帰れない。みんなから大勢に万歳万歳と叫ばれて出た人が、間に合わんということで帰れなかった人が多かったんですが、私は自分の専門の道をやれと言われたんだから、そうだ！こう覚悟して電報を打って、あくる日東京へ戻ったんですが、それから私は『法華義疏』によって思いがけもなく恩賜賞という天皇様の賞を頂戴した。ある人はそれを博士論文に出しなさいという人もいたが、天皇様から恩賜賞を頂戴したものを二重に使う博士論文にするのは恐れ多い。まだ年が若い。聖徳太子がお書きになったものはまだほかにも、『勝鬘經義疏』、『維摩經義疏』とかある。これを勉強しなければということで、即日帰郷で帰った後でいいから、東京大学の講師でございまして、図書館の中で教官だけ専門に勉強する教官研究室というものがある。そこに立てこもって毎日毎日『勝鬘經義疏』の勉強をしまいたのでございまして、母が死んだあくる年に思いがけもなく、東洋文庫から出版していただいた『法華義疏の研究』が恩賜賞というものに、学士院の恩賜賞というものに選ばれた。

これはまったく思いがけないことでありまして、年はまだ36。この36の若さで学士院の恩賜賞を頂戴した人はなかなかいない。ことに仏教のもの、それがたまたま聖徳太子がお書き

になったというものを証明を中心として研究したものであったためかと思うのでありますが、学士院にはその当時わたくしの恩師である高楠順次郎先生だけでなく、辻善之助さんという日本の仏教の歴史を勉強した偉い先生も学士院の会員になっておられる。法隆寺の佐伯定胤猥下も学士院の会員になっておられる。おそらくこの、辻善之助先生のお言葉によって、わたくしの研究がとりあげられて問題になったと思います。それには高楠先生なり、佐伯定胤先生のお力添えがあって、学士院で全体で、100人の選ばれた先生たち、それが評論されて、思いがけもなく恩賜賞の第50号、学士院が始まって以来25年目。二人づつ天皇様からの恩賜賞がいただける理科系統がひとり、文科系統がひとりずつであります。理科には医学関係やら工学関係やらあるいは土木関係やらが。文化系統では、法律なり経済なり、歴史なり哲学なりいろいろあるなかで、私が太子様のお書物を研究したものが年若くして恩賜賞に選ばれたのでしょうが、その恩賜賞を頂戴するときに、家族親戚ご恩になってた人たち、招いてよろしいというので、案内状を招待状をいただく。

この間も金沢に帰ったときに写真を見ておったときに、私の家内の父と、その家内の父に抱かれている勝友、花山勝友。これが3歳。その後ろに勝道いま金沢のお寺でわたしのあとに寺の住職をやっている52才勝道、その下に家内。いう風に、あとは親せきと、並んでいる写真を見た時に、そこでこの、勝友が3つのときに、おじいさんに抱かれながら、私が呼ばれて、賞を頂戴するときに、手をたたいた。手をたたいているときの写真が出ている。この間も勝友にこれを、あなたが3つのときに恩賜賞の場所に出かけて、手をたたいたらしいなと、そんなことを書いてある。「申し訳ございません。私は小さい時分の時からしゃべってたんだなあ。」というようなことを言うておりましたが、ところがその賞を頂戴するときに高い階段の上のところ、学士院の会長さんの椅子が一つ、総理大臣の椅子が一つ、宮内大臣の椅子が一つ、文部大臣の椅子が一つ4つの椅子が並んでおった。毎年、受賞の時には総理大臣と文部大臣と、恩賜賞だからおそらく宮内大臣、出られたんでしょうが、ところが学士院では学士院で用意してなかった内大臣牧野しんけん（伸顕・「のぶあき」）伯爵が入れられた。大急ぎで椅子を一つ増やして、並び変えたということをおし聞いたんでありますが、内大臣というのは牧野さんで、その方のお嬢さんが吉田茂さんの奥さんになっておられる。まあなかなか権力もあったし、おそらく今まで内大臣は出られたことはないとおっしゃっておられたが、天皇様の代わりに出られたのではないかと、うすうす考えておるのでありますが、今は毎年天皇様ご自身が終戦後は賞の時は出られておりますが、あの時代、戦争前の時代は天皇様という方はほとんど外に出られたことがない。お声も聞いたことがない、敗戦の詔勅をラジオで聞いたのが始まりだった。この頃はよく色々なテレビのなかに、天皇様のお声を聴くことができますが、牧野内大臣、岡田総理大臣、松田文部大臣、宮内大臣という大臣が揃って出られた。

そこで賞を頂戴したあと、私が太子様のお書きになったと信じておる『法華義疏』を前に

その他いろいろな書物を並べて、皆様にご説明をしている姿が写真にとられて今現在残っておりますが、その後、宮中に召されて、ご馳走を頂戴した。学士院の先生たちとともに。そのときに高松宮様の前で、「研究の内容について説明するように」ということでございまして、それを申し上げたところ、高松宮様は、おそらく天皇様の代わりに出られたんですが、「あなたの研究された『法華義疏』。それと憲法十七条とどちらが早いんですか。」とか、「どちらがどうなっているんですか。」というようなことをお尋ねになったことを思い出す。ご説明も申し上げておった。それで「実際の宮中に残っておる御物の『法華義疏』を見たのか、見ないのか。」そうおっしゃったから、「それはまだ拝見していません。印刷されたものだけで勉強させていただきました。」と申し上げたところ、宮様が後ろに立っておられた宮内大臣に、なんとかそれを見られるようなことをしてあげたらどうかと言うておられた。宮内大臣は頭を下げられておられたが、おそらくその関係でしょう。その恩賜賞を頂戴した。昭和10年の8月の末、2日間、宮中で爆涼が天皇様皇后様がよその別荘に、避暑においでになったときには、宮中には天皇様皇后様おいでにならないから、そのときに天皇様の色々なご所有の大事なものを虫干し、爆涼されるということが毎年あるらしいけれども、大事なものがたくさんあるから、1度に出されるわけにはいかない。4年に1度くらいしか出すことができない特別な配慮があったとみえて、太子様のお書きになった直々の『法華義疏』四巻がずらりと全部、四巻全部そろえてガラス張りの拝見棚の中に陳列された。この2日間陳列するから、来てもよろしいというご案内があったので、朝の9時からそれを仕舞う午後の4時まで、ぶっ通しでその部屋で勉強させていただいた。もちろん、ガラス張りの拝見棚の中に陳列されておる、というと宮内省の番人の人たちが、モーニングを着て、真っ白な手袋をはめて、恐る恐るしてやっておられる。ハウメイ殿とチクサノ間これは戦争で焼けてしまった。現在は新しい宮殿ができておりますが、昔の焼ける前の立派な、ハウメイ殿とチクサノ間に、いろいろな尊い天皇様の御物が爆涼虫干しされておった。『法華義疏』の四巻を拝見させていただき、2日間ぶっ通しで10数時間勉強させてもらったんだが、どうもこの字の裏が見たい。下を向いて見るわけにもいかんし、宮内省の方が大きな鏡やら懐中電灯やら、えー、虫眼鏡やらお持ちになって勉強することをいろいろと便宜を図っていただいたんでありますが、まったくわたくしとしまして、尊いご因縁に会わせていただいたと思って喜んでおるのであります。

そして、先ほど申し上げました通り、えー……（長い間があり）

母のために、『往生要集』を勉強したのがようやく出来上がった。やれやれと思ったあとに、赤紙が来まして、応召。即日帰郷で帰った。それから、『勝鬘經義疏』の研究にとりかかった。約4年間近く、（したがって）これを勉強して東京大学に提出して、皆様のおかげで聖徳太子の『勝鬘經義疏の研究』で文学博士という学位を頂戴した。『法華義疏の研究』で恩賜賞を頂戴し、『勝鬘經義疏の研究』で博士号を頂戴。全く私という人間は太子様のご恩を受けて、

太子様に生きさせていただいたんでありますが、そうこうしておるうちに結局日本軍は段々始めはよかったが、あとになるうちに、負け戦になる。国民には知らされなかったけれどもサイパンが陥落した。これからアメリカのB29が、大きな爆撃機がどんどん日本にやってくる。こう考えて、政府の方針が変わったらしい。東京の、その時は市長であったでしょうか、ラジオで命令が出た。今まで地方に疎開したものは、再び東京には入れないという方針だったが、戦争の波が少し様子が変わった。疎開できるものはできるだけ早く疎開しなさい。こういうことがラジオで知らされた。何か、これは変わったんだ。こう思いまして、そこで、隣組の班長もしておったが、隣組の皆さんに、私たちにこうこういう命令が出たから疎開いたします。あなた方もできるだけ、疎開できる方は疎開しなさい。こう申し上げて私の長男と次男とふたり、学校に行っておるところの武蔵高等学校、7年制の高等学校、子供の学校は休まずわけにはいかん。これになるべく近いところ、百姓さんの田舎の^{ひとま}一間でもいいから借りることができるならば、頼みに行ってくれと家内とその後生まれた娘とを連れて出させたのでありますが、それがたまたま、現在おりますところの東久留米市。行ったときは村で、久留米村という、北多摩郡の久留米村の田んぼの中に、畑の中の一軒家に行ったんでありますが、たまたまそこへ初めてB29の爆撃隊がやってきた。東京を取り廻す一里四方、一里四方をぐーっと最初にサイパンからやってきたアメリカの48とか49とか、飛行機がやってきて爆弾を落とした。ヒュー、干潟であります、私の小さな久留米村の田んぼの中に、25キロの爆弾が43発おこった。それが最近まで地下にうずもれているものがありまして、自衛隊の兵隊さんが恐る恐るそれを発掘しておりますが、25キロの爆弾が、43発も同じ村に落ちたということは、ちょうどその、噴煙のなか東京都を取り巻く一里四方の近く中島の飛行機会社があった。この日本のゼロ戦闘機を作っておる、中島の飛行機会社を爆撃のために、東京を取り巻く全体を爆撃する。それが段々と毎日毎日縮めていって東京都内まで爆撃したり焼夷弾を落としたりしたのが、このアメリカのやり方で、それ以来あるいは名古屋、あるいは大阪、日本中に、アメリカのこの爆弾が落とされるようになったのでありまして、終戦になるひと月前、家内と一緒に疎開するようについていったひとりの長女・信子が、食料異常・中毒のために、1日で亡くなりました。

その頃は昭和20年（1945）の7月の18日でございますので、お棺を作ろうにも、こしらえる材料もなければ作ることもできなかつた。そこでなんとか、移住のために疎開のために、小さなスニーカー（リアカー？）を借りた。田んぼの中に建てようとして、やっておった。この材木をもとに、私と長男と二人で、小さな箱をこしらえて、その中に娘を入れて、引張っていく。霊柩車やそういうのはないんだから、自転車に乗せて、私と長男とで、2里か3里歩いて火葬場に持ってって、山ほど死体が積みあがっている火葬場の中で、幸いにも私が知っている人が、そこにおりました。「花山先生のものなら、いますぐやりなさい。」と頼まれて、待っている間に遺骨として持って帰ったんでありますが……まあ、娘が亡くなった

ことによって、いろいろの教えを頂戴いたしました。そのあくる月に終戦になった。8月15日、まもなくやってきますが、終戦になりまして、ここに日本全体が現代の、新しい時代を迎えて立ち上がる。

こういうふうになったのでありまして、終戦からあと今日までのいろいろなこと、巢鴨プリズンの関係なり、あるいはその後の法隆寺の夏期大学のことなり、わたくし自身の、太子様の『三経義疏』のことなり、まあそういうことについて、申し上げたいと思うのでありまして、中間でお休みもしないで、2時間ぶっとおしで、お話申し上げ、10時からちょうど12時。誠に窮屈で、ご大儀であったと思いますが、こんなことはどこにもしゃべったことがない、ゆっくりとあなた方に申し上げた。つまらんで話であったかもしれませんが、これからあとがどうなっていくのか、巢鴨プリズンの関係のことなり、法隆寺の夏季大学のことなり、あるいは太子様のお書物のことなりについて、午後の時間をかけて申し上げたいと思います。……ありがとうございました。

(午前終了)

(午後前半)

「三婦依文」唱和

みなでお念仏を唱え始まる。

午前には10時から12時まで約2時間、お話し申しあげたのでございますが、途中でご不便もあったと思いますが、この度は1時間10分、20分のところで、5、6分ほど中休みをいたします。

この午前中には、結局私たちが、東京の都内新宿に近いところに、長く住んでおりまして、そこでは3人の男の子供と1人の娘と4人生んだ場所でもございましたが、いよいよ戦争がたけなわになるようになって、もう日本中が爆撃の圏内に入ろうとしたために、できるだけ東京から外に疎開するようにと、政府からの命令が出ましたため、現在東京におります田舎の久留米村というところに疎開したということをお話し申し上げて、ようやく終戦間近になって、そこで一人の長女を8歳になりますのを、1日のうちに食中毒で亡くなっていったことを申し上げて、またその村には30数発の25キロの爆弾が落とされて、死の中に、私たちの命を何とかして、持ち続けてきたことを考えながら、申し上げてきたのでありますが、いよいよその娘の亡くなった翌月、8月の15日には、天皇様の国民をお思いになる真心から、朕の身はどうなってもよろしい、一日も早く戦争が終わるように、広島と長崎には、原子爆弾が落とされ、おそらく日本は壊滅の一步手前というところで、いよいよお腹の中に考えておった政府の役人にもあったと思いますが、天皇様の思し召しになって、結局終戦、結局負け戦に終わったのであります。

皆様方にも今から35年前、思い出出しになる方もおると思いますが、初めて天皇様の声をラジオに通して、聞かされた私たちは、なんだか本当に悲しいやら、戦争が終わったという安堵の気持ちやら、きわめて複雑な気持ちで、あのみ声を玉音を聞いたのでありますが、わたくしはそのあくる日の朝、早くから、5時ころから起きだして、東久留米の仮の住まいの3畳間に座り込んで、お食事の時間と、トイレに行く時間以外は十数時間ぶっ通して仕事を始めた。何を始めたかと申しますというと、わたくしがあの応召をしたときに、軍医の言葉、「お前にはお前の専門の道で国に奉公するように」と、即日帰郷をさせられた気持ちを思い出して、今こそ日本の国の明治以来、文武両道と教えられて、それぞれの道で、軍人は軍人、文人は文人それぞれの道を一生懸命やってきた。今日限り、日本の陸軍も、空軍も、海軍もすべてなくなっちゃう。いままで武人が大威張りでやってきた世界に類もない、一番強い国だと誇らしげにやってきた日本が減びてしまった。なんとか、ここに、私たち文人として〔 〕に立ち上がる。今後の負けた日本は新しく文化国家・平和国家として、育てなければならん。こういう気持ちが、そこに私は責任を感じまして、私の隣には、中島飛行機会社の部分品を作る工場が、森永のミルクを作る牛小屋牧場の牛小屋で毎日毎晩ぶっ通して働いておった男の方女の方、たすき・赤鉢巻きでやっておった人たちが、戦争に負けて、アメリカはじめ戦争に勝った国の人たちが日本にやってくる。我々はどうなるかわからん。先生そんなことしていいんですか。かわるがわる私が机に向かって、3時までやっておるところに顔を出しながら心配そうに、えー、やってくる。まあ安心なさい。まさか我々は殺されるわけではなかろう。もしアメリカの兵隊がやってきたら、私が相手になるから、と言って慰めながら、やっておったのが、私が戦争中に勉強させていただいた聖徳太子の『勝鬘經義疏』をなるべくわかりやすい言葉に直して、あるいは満洲、あるいは南方の国に、あるいは台湾等から帰ってくる若い今後の日本を背負う青年たちに、太子様のご精神を受け継いでいただきたい。これが私に与えられた一つの使命であると考えて、2か月半ばかり毎日毎朝ぶっ通して、『勝鬘經義疏』を、これを翻訳することを始めたのであります。

それができたときに、岩波のご主人の所にもって行って、どうかこれを岩波文庫で出してもらいたい。前には『法華義疏』を上巻・下巻として、昭和6年と昭和8年に出していただいて、それから何遍も再版されておるけれども、太子様の『勝鬘經義疏』は、わたくしが戦争中、即日帰郷から帰ってから4年余り、一生懸命勉強させていただいて、これで文学博士の学位を頂戴いたしまして、なんとかこれを岩波文庫に出して、みんなに分かるように一つお願いしますと言って持って行ったときに、岩波書店のご主人の岩波茂雄さん、言われるのです。「先生、あんたの気持ちよくわかるけれども、東京はほとんど爆撃されて、印刷所というものは残っていない。紙もありません。なかなか再び岩波文庫に出すと言っても、そう簡単にいきません。」無理もないと思う。紙も配給だけしかない。文庫を出すだけの紙がない。印刷所も焼けている、職工もいない。無理もないなあと思いながらも、とにかくお願いして、

えー頼んだのが、それから3年の後に、岩波のご主人が長野県の小さな印刷工場を探し出して、そこで印刷をして、安っぽい闇紙ざら紙に、出してくださったのが、戦後のおそらく初めて出た『勝鬘經義疏』、太子様のこの勝鬘經のご注釈の薄っぺらい本であるんですが、そのときに、『勝鬘經義疏』の岩波文庫に書いた私の「序文」がついておるのですが、今ではもうこれは絶版になっておって世の中にはございませんが、どういう気持ちでこれを書いたかというのが、まざまざと、その「序文」に出ておる。

日付が昭和20年の8月の16日、戦争に負けた。天皇様のあの御声をラジオで聞いたあくる日の日付となって、「花山信勝謹んで誌す」と書いてありますが、その中の一部分だけをここでわかりやすく言葉を直して、ご説明いたしますとこういうことになる。思い出される方もありましようし、お年の若い方、30代40代の方には初めての事でありましようが、急いで読んでみます。昭和20年8月15日の正午、太平洋戦局終末に関する天皇様の詔を、天皇陛下ご自身玉音^{ぎょくいん}をもって、1億の我が日本国民にお告げになった。まことに畏き極みと申さねばならない。その天皇様の言葉の中にこう申された。「万世のために太平を開かんと欲す。」将来の永遠の日本のために、実に平和な新しい日本をこれから始めようというのが、天皇様のお気持ちだとおおせられ、また誓って「国体の精華を發揚し、世界の進運に遅れたらんことを期せり。」ヨーロッパやアメリカや、ソビエトの国々に負けないように、日本の国の平和の文化再發を努力してもらいたい、という御戒めがあった。強力折伏で敗れた武力に代わるのに、我が国体の生活を、精華を發揚するの道は、一に懸って我々文人の双肩にあると言わなければならない。昨日までの防護、爆弾・焼夷弾に対する守り、防護と増産、生きていく食べていくための野菜なり、そういうものを作る、増産の生活を一新して、本来の道に邁進し、聖慮天皇様のお気持ち、聖慮の万一に込え奉らんと発心していく。ここに『勝鬘經義疏』の訳読に取りかかる。私として、お国に対する、この負けた日本をなんとしなければならん、責任を感じて『勝鬘經義疏』を訳し、それを皆様にご読んでいただくような、仕事に取りかかっていく。そもそもが日本国の文化の開發は、遠く神代の御世、神代の太古にありといえども、天皇の御前、大御前において、謹んで公表された最初の書物は実に勝鬘經1巻であった。今から実に1340年の昔である。そのあくる年に、あの大札の小野妹子は聖徳太子様の思し召しによって、日出づる処の天子、かくるところの天子にいたす。あのわが日本国家が隋国に国書をもたらし、大陸の隋に伝えせしめたのであった。それにより日本国が遠く隋にまで知られ、大陸と島国日本とが文化外交を開かれるようになった。その後、日本文化交流の礎石となったのである。

太子ご自身がお作りになった憲法十七条のそれぞれの1条1条は、実に我が国開闢以来、皇祖皇宗のご精神のあらわれとなったと申すべき成文である。古今東西のいかに問わず、万世中外に示し給うた我が日本国民の全科玉条といわねばならない。尊い憲法十七条である。その中でも第二条に「二に曰く、篤く三宝を敬え。」この1条こそ、現在戦争に負けた我が

日本国民の最も深く感に銘じ、これを謹奉すべき1条と信じている。「いずれの人がこの法を尊ばざるや」、また「万国の極宗なり」とお示しになった。

仏法僧の三宝に帰する。三宝をうやうやしくお敬いしてお任せする心が無かったなら、人間のまちがった心を通り直に、もとに戻すには仏法僧の三宝に帰依する以外にない。この三宝こそ時・所を問わず、万世を貫き、中外に普ねく「正法」であることを太子がお示しになったのである。深い自己反省に立脚した、この正法を篤く敬うことこそ今後の新しい日本建設の基本と申さねばならない。この正法とは何か。これこそ推古天皇の勅(みことのり)によって、摂政上宮聖徳太子ご自身が、親しく推古天皇の御前で御講義遊ばされた勝鬘経の中に「摂受正法」の一章を中心として説かれている。推古天皇御前の講義のあとで、小野妹子等を随までお遣しになった。太子のお心の中には、国家万世後々迄も、太子講讀のご精神を伝え、これを記録として留め国民精神の永遠の未来にわたり指導したまわんとおほし召めされて、そのためにさらに十分な参考文献が必要として、さらに直接随までお求めになったとも考えられる。妹子の二度の行き来により入手した中国大陸大乘学者たちの作った注釈を参考として、太子御自身の御立場において、立派な点は採りあげる。お考えにならないものは捨てる。長を採り、短を補うという事によって、ご講讀されたお経典に注釈をお加えになったものこそ、『勝鬘経義疏』一巻である。(筆者註：これより、口述ではなく序文の最終部分原文を引用する。)[したがって、此の勝鬘経義疏一巻こそは、我が日本最初の天皇御前講讀の記録であると共に、我が日本最初の御著述であり、殊に崇峻天皇崩御直後の非常時日本を見事に新建設し給へる摂政聖徳太子親作の御書物であるところからしても、現代非常時下に置かれた我々が謹んで奉読し、その御精神を受け継ぎ、以って万世の為めの新日本建設の一大指針と仰がねばならぬ貴重なる書である。我が肇国以来の此の一大難局に直面せる国民の一人として、聊か宏大の国恩に報い奉る可き万一の途として、大詔を仰ぎ奉ったその日から心を改め謹みて本書の訳読に着手したのは、太子の義疏を拝読して以来、既に二十五年、久しく心中に此のことを願ひつつ、遂に今日に至った私罪を懺悔し、国民としての万分の責を果し得んことを願ったから外ならぬ。昭和二十年八月十六日 花山信勝 謹誌]

やれやれと思っておった時に、たまたま巢鴨プリズンの中に、今まで日本を指導した大勢の大將たち、大臣たち、大学の教師たちをはじめ、財界の人や色々な人が戦犯容疑者、戦犯として疑い深い人たちとして、巢鴨の中に連れていかれた。

ここに仏教の坊さんをひとり寄せせという、マッカーサー元帥のほうからの命令である。アメリカには基督教の新教、基督教の旧教、ユダヤ教、これらのチャップレン。軍人になっておるところのお坊さん達はあるけれど、仏教のお坊さんはおらん。したがって、アメリカ本国にゆうてもそういう人はおらん。負けた国の日本のなかでひとりだけ、仏法のこのチャップレンと並べる人間をとにかく選んで寄せせという命令が日本の政府にきた。

その時の総理大臣は、幣原総理大臣だったと思いますが、日本の国では明治からあと仏法

というのは政治からまるきり切り離されて、ほったらかしになってある。お寺がどんなに破れようと、国民の中の精神教育がどうなろうと、学校教育だけで結局宗教教育というのは、文部省の中には入れない。また、政治のなかには入れない。政治と宗教の分離という立場をとってきたが、マッカーサー元帥の命令でてんでこで、全く手につかないのである。というようなことを、耳に聞いたので、わたくしでも良ければまいりましょうと、こういったのがきっかけとなって、私が巣鴨のプリズンに入って行くことになったのでありまして、わたくしとしては、仏法をわたくしの責任として学ばせていただきまして、お寺に産んでいただいて、一人前の勉強もさせていただいたんだが、幸い京都と奈良とはアメリカのB29が、爆撃してくれなかった。大乘仏法というのは尊いこと、あれを爆撃する、焼夷弾を打ち込めば、一撃のうちにお寺を焼き、仏像や経巻なども焼き落ちることは知っておったが、結局これをやれば、世界の地上から大乘仏法は消える。なんとかそれだけを、やめてほしいということを願われたアメリカの優秀な人もあった。アメリカの軍はそれを受け入れて、京都と奈良は爆撃をしない。その他の日本はあちらこちら、ほとんど爆撃をしておったんですが、ともかく武力がなくなった日本。今後の日本の国が、世界に向かって、何か打ち出す、御恩返しをするとなれば、仏法以外にない。インドに起こった仏法はインドに滅んでおる。そうして、わずかにセイロンの小さな島や、あるいはビルマやタイ国やカンボジアやベトナムには仏法は残っているけれども、どちらかという小乗系統の仏法である。お釈迦様当時の仏法である。中央アジアから大陸の中国を経て、朝鮮半島から日本に伝わって、千数百年のあいだ、日本の地に育った大乘一乗の仏法。聖徳太子以来育てられたこの大乘仏法は世界のどこにもない。この仏法を世界の人たちに教えてあげることがただ一つ残された、日本が世界に恩返しできる道だと、こう考えてわたしは巣鴨の中に入れば、アメリカの将校や兵隊さんたちに直接会って仏法を話す機会もある。また、巣鴨の中には今までの大臣やら大将やらいろいろな大勢の方が入っておられるが、戦争中はまるっきり仏法を排撃した人たちにも、戦争に負けてどうなるかわからん人たちに、明治以来仏法をないがしろにした人たち、いくらかでも仏法を伝えてあげることができるのならば、この気持ちで、私はあの応召をしたときに、どうせ死を覚悟でいったのが、お前にはお前の専門の道で国に報いなさいと、即日帰郷させられたあの気持ちがずっと胸の底にあったので、いまこそ武力に負けた日本を仏法によって立ち上げる用意するのがわたくしに与えられた使命の一つだ。こう考えて、巣鴨入りをした。アメリカの高官は、日本にはいろいろな宗旨宗派がある。禅宗も、天台宗・真言宗もある。真宗もある、日蓮宗もある。浄土宗もあるが、中にいる人たちはいろんな宗派が違うが、一人だけ寄せ。あらゆる宗派に通じたことのできる人。また各宗の管長という、60、70、80代の人たちはダメだ。体力が続かない。もっと若い人、そして英語がわかる人、こういう注文があったらしいので、偶然にもわたくしがその、アメリカが要求する道にあったらしい。巣鴨プリズンに行って、巣鴨の所長さん、アメリカの大佐、それからキリストの新教のチャップレン、

牧師さんたちと会ってお話したら、1カ月前から日本の政府に頼んでおったんだが、今まで日本の政府は誰も送ってよこさなかったが、明日からでもいいから来てもらいたい。あんたならそれでいい。英語で履歴書を書いて持ってきて。そういうことだった。

実は私はその当時は東京大学をはじめ、あるいは、東京文理科大学、あるいは東洋大学、國學院大學、日本大学5つ、6つの大学を掛け持ちしておったんで、なかなか忙しかったんだが、1週間に2度ならまいりましょう、と申ししたところ、それならば火曜日の午後と、木曜の午後とずっと来てもらいたい、ということで早速それが決まったのでありますが、だんだんだんだん巣鴨の中に容疑で入れられた人たちの数が増えてきて、ときには2000人以上になったことがある。A級、B級、C級。そして、いったん巣鴨に入った人たちが、またそれぞれ、あるいはフィリピン、あるいは香港、あるいはマニラ、あああチャンギン、あるいはシンガポールあちらこちらで裁判のされるところに送り出されていかれた。巣鴨に残った人は約600人前後で、A級、B級、C級、これは日本の内地で問題を起こした人たちだけが残されて、で、こういう人たちにお話することになった。あのひとたちは、戦争前か戦争中、軍人勅諭であるとかそういうものを中心に、人を指導おったひとたちであった。どういう風にお話を始めようか、そう考えたときに、まず皆様と一緒に声をそろえて読んでいただいた、「三婦依文」を読んでもらった。全部立ち上がって私も立って、三婦依文を読むことを始めた。それから三婦依文の内容をご説明することから始まった。仏法僧の三宝に帰依するという、帰依の心がなかったらすべて仏様の祈り、僧伽の和合の教団にお任せするというこの南無の気持ち、帰依の気持ちがなかったならば、宗教というものは自分のものにならない。素直な気持ちで、自分の命も体も財産も、すべてを投げ出してお任せする。この南無の気持ち修行の気持ち、帰依の気持ち、ここから始めるという気持ちでそれをはじめ、それからだんだんいろいろと始めたんでありますが、巣鴨の中には、男の囚人のための男囚のためのお仏壇と、女の女囚のためのお仏壇が2通りあったらしい。戦争に負けてからはそれは全部よそへ、移し出してしまった。そのあとに進駐軍が、あれをプリズンとして使うようになったから、なかには、十字架、キリストの磔になった像、こういうものが祭壇に祀ってある。そこで、日曜ごとに、巣鴨に勤めておるアメリカの将校なり、アメリカの兵隊なりに日曜のサービスが行われておった。わたくしが巣鴨へ来た以上は、やはり十字架ではだめだ。お仏壇が必要だ。ということを申して、どこへ昔あったお仏壇が行っているかということをいろいろ調査したところ、中野の刑務所に移したということで、そこでアメリカの、ああ、下士にジープにドライブしてもらって、中野の刑務所まで、昔巣鴨の刑務所にあった、男囚用のお仏壇と女囚用のお仏壇とをもらって、そして、巣鴨へ戻った。それを組み立てた。そうして、そのお仏壇の前で一緒になって、正信偈を読んでもらう、三婦依をと覚えてもらう。そうして、ようやく2、30分間お話をします。

前後1時間を繰り返し、ともかく、巣鴨には600人も800人もおられるんだから、一堂に集

まる場所もないし、また一堂に集めては危険だということだったんでしょう。ともかく40人くらいから、6、70人くらいずつ、振り分けをしていく。アメリカの将校に仕切られて入ってこられた。はじめは、どてらのようなものを着ておった人もおるし、バンドのようなものは全部とりあげられておった。自殺するかも知れない。帯もしめない。そういう格好で下駄をはいて、ガラガラとやっけてこられた。本当に仏法の話聞いたことがない人が多いから、おそらく、説教節でも聞こうか、落語でも聞こうというような気持ちで来たのでしょう。だんだんお話をしているうちに、皆様の姿勢が変わってきた。真剣に道を求めるという気持ちに、だんだんと進んで行かれた。なかには寂しい気持ちで、暗い気持ちで、どういうことを考えておられるのだろう、なんか明るい気持ちにしてあげたい。こう考えまして、きれいな花とおろうそくと、香りのよいお線香と、これが必要だ。アメリカ人ならば、お花ぐらいはなんとか手に入るだろう。ろうそくはキリスト教の儀式に使う。あの白い、西洋ろうそくで結構だ。お線香とお香は本願寺から送っていただきます。ところが、戦争直後の日本には、お花というものがなかなか手に入らない。我々日本人はあたり前のこと。なんとかきれいな花を見ながら、心がなごむようにしてあげたいという気持ちでみえた。進駐軍でも手に入らないとみえて、「ドクター花山どうだ。花はどうしてもいるのか。」「いる。」「なぜいる。」と言われたから、私の気持ちを言うわけにはいかないから、「仏さまというのは絶対のもので、見ることも、触ることも、聞くこともできないもの。その仏さまというものをわれわれ人間に、この伝えるためには、仏様の優しいお慈悲と、それから仏様の尊い知恵と、明るい知恵と、これらをもって、示さなければいけないから、花は仏様のやさしいお慈悲をシンボライズしているものだ。」「そうか、それなら必要だ。」理屈でいくのがアメリカ人だから…「ろうそくは、仏様の明るい心の智恵なのだ、その通りだと。これをろうそくの火で、シンボライズするのだ」「それなら必要だ。お香はどうするんだ？」こうきた。「お香はね、こちらの人間の汚い、煩惱の穢れを、打ち消して、そうして、仏様の清らかなこの気持ちを受け止める。つまりお香というものをたくのだ。」「それなら必要だ。」という風に、そのときそのときの思い付きのようなことですけれども、理屈を説明せんと承知しないのがアメリカ人。そういったようなことで、花と、おろうそくと、お線香を寄せた。明るい気持ちになってくださればいいなあという、お数珠を本願寺から送っていただく。その当時の御数珠は安っぽいお数珠で、1連が10銭、いまはそんなお数珠があるかわかりませんが、10銭の、10円じゃない。10銭。それをずっと入口の机の上に置いて、お数珠をかける人はそのお数珠をどうか手に持ってください。だれ〜も、その数珠を持つとしない。お数珠を持った経験のない人ばかり。若い人も年寄りも、これじゃいかん。こう考えて、その次には、座られるベンチの上にお数珠を並べて置いた。そうすると、アメリカの兵隊と将校に連れてこられたA級、B級、C級の人たちがお数珠の置いてある処を避けて、なるべくお数珠とお数珠の間に腰掛ける(聞いている人たちから笑い声)。お数珠は縁起の悪い物だと考えたらしい(うんうん、の声)。

錠で縛られて、体にくっつけられるところから、手に持ったお数珠をいただいて、奥さんたちに渡していただいた。それは今でも東条さんの奥さんのところに大事にしまっておく。おかしな格好のままのお数珠であります、はじめは嫌で嫌でならなかったお数珠が後に懐かしいお数珠に変わった。お数珠がなかったら、本当に喜び、感謝の安心の気持ちがまあ薄らぐぐらいに大事に持つようになられて、それを妻に、子供に、孫に、ひ孫にと、おそらく東条さんのおうちでは、あるいはほかの大将のおうちでも伝わっていくのでありましょう。これが尊い因縁になるのであります。

東条さんの奥さんは今年90近い、90前後、非常にお念仏を喜んでおられる。あの当時は恨みやら、憎しみやら、はらだちやら、日本中から「東条、東条が、勝子、勝子だ」と、言われておったといわれ、なかなか激しいお気持ちであったんでありますが、このごろは、本当にやさしい、安心しきった、その、念仏の情念になっておられるのですが、そうこうしておるうちに、結局絞首刑が始まった。わたくしは1か月か2か月、巣鴨に行って、あの人たちに、いろいろ家族への連絡なり、願い事なり、そういうことを伝えてあげようと思うて、1か月か2か月ですむと思っておったのが、3年半巣鴨へ大学の講義をやりながら、通うことになる。

その間にだんだんとC級の人たちが、絞首刑を受けて、死んでいかれることになった。1番最初に亡くなったのが九州の大村の俘虜収容所で、最初の1代目の所長をしておった由利敬（ゆり・けい元中尉）氏。中学を卒業し、5年の中学を卒業し、やれやれと思われたお母さんも東の間で、赤紙が出て、召集を受けて抜擢されて、少尉中尉となって、大村の俘虜収容所の所長になった。戦争中は、みんな周囲の人たちからうらやましがられて、1人の息子さんがねえ、うれしいねえと言われておったのが、戦争負けた途端に横浜の裁判で日本人として真っ先に絞首刑を宣告されて、お母様の気持ちとしては実際いたたまれない。けれども由利さんが亡くなられたときに、やはり今まで仏ということをやったこともなければ、考えたこともない人が、仏様の前に手を合わせて、天皇陛下万歳、大日本帝国万歳を唱えながら、「敬は死にません。死にません。仏様にさせていただきます。死ぬんじゃない。仏様に、永遠に生き続ける仏様にさせたまうのであります。」と言って亡くなっていかれた。その次亡くなっていった福原勲くんのそのときも、一度は巣鴨の牢屋を逃げ出して、年を取った両親に、年若い嫁さん、ひとつふたつの子供、弟や妹、こういう人たちの中心になって自分は女房のためには働こう。巣鴨を逃げ出すのに万が一失敗したら、自決をする。アメリカなんか殺されるか。これが戦争中の軍人の心得であった。こういう気持ちで、その方向へ向かっていろいろ実行しておったのが、たまたま自分の嫌った。オレバイ（？）とか、抜き出しておった古クギだとか、トイレの紙で、紙こよりをこしらえて、で二重に合わせて縄を作った。自分の独房の下に隠しておったものを、一斉検査によって発見された。それからというもの、嚴重に1時間交代、アメリカの兵隊が昼も夜もこの人たちが、囚人として監視をするよ

うになった。これがこの日大きなところにも転換の因縁となった。「先生、申し訳ございません。どうしたんだ。わたしはこうしてこうこうこうだった。人間を相手に、今日まで分からんであろうし、ばれんとやっておったわたしが愚かな人間でございました。仏様の目からは朝も昼も夜も絶えず、私を見ておった仏様をごまかすことはできなかつた。つまらない凡夫のわたしでございました。」と、こう気が付いてからこの人は、まるっきり人間が変わっちゃった。人を相手にしない。暗いところであろうと、一人ぼっちのときだろうと、絶えず仏様が私を見ておって下さる。目に見えない仏様相手の生活だから、実に生き生きとした立派な人間によみがえった。その自分も毎日毎日の感謝喜びの気持ちをいろいろのものに書き残して、あるいはお父さんやお母さんに、あるいは妹や家内に、ひとつふたつの娘と、ああ息子という風に残したものが、実に立派なものが残っておる。

私が忙しいから、そういうものを、お父さんにわざわざから東京にやってこられたお父さんに渡さねばならないから、写しにしておこう。うちにおった、私の長男と次男、いま金沢におります勝道(しょうどう)と東京におりますわたくしと一緒にいます勝友(しょうゆう)と、高等学校におった。これを写せ写せと、写させておったのが因縁で、この長男も次男もはじめは、お医者様になるとか、薬剤師になるとか、お金の儲かる世界に、貧乏学者の仏教学者じゃ生活できん。わたしの毎日を知ってるから、やっておったのが、ほおっと変わった。どうか仏法の、日本の仏教の勉強にさせていただきます。長男も次男も、それからずーっと、私の教えを聞きながら、7年間勝友(しょうゆう)のもとで東京大学に私の講義を聞いてくれた。そうして現在は、あちらこちらで仏法の話を見せてもらっておる。長男も高等学校の教頭をしながら、お寺の住職になってくれたし、三男は富士山の自衛隊の連隊長をしながら、駐屯指令をしながら、皇太子さまと一緒にの学習院の政治科を出たんでありますが、一人ぐらい日本を守る者がおらんといかんだろと学習院を出たんだが、自ら自衛隊に飛び込んで、ともかく今は自衛隊の中で、宗教を中心とした、〔 〕との、うーん、毎日の生活を共同しておるような次第。尊い因縁で、うちの息子3人もがそういう方面に行っておりますが、これも福原さんのおかげだと。

そして、福原さんの亡くなった後に、家の中に入ってあった文房具の紙の中に、トイレの紙にこう書いてある。「おかげさま。今日も一日生かされたぞ、ああ、もったいないありがたいなあ、南無阿弥陀仏。」「おかげさま。今日も一日生かされたぞ、ああ、ありがたいもったいないなあ」と。この人はもう、絞首刑が決まっておる。いつ何時殺されるか分からん。私たちも死んでいくのが決まっておる。絞首刑じゃないけれども必ず人は死んでいかなければならぬ。お陰さま……。

(中断・テープ交換か?)

(しばらく音が小さく聞こえない)

死んでいかれる前の晩、あなたは立派なものをたくさん書き残したが、

(聞こえずらい)

先生先生言われるけれども……年若い30になったかならない若い年ですが、君は実にあの方は菩薩になってしまった。私も後をかけていくよ、お浄土では一緒だよ、まだ人間としてこの世に生きてる限り、ただただ巢鴨の一遇におられると知っておったら、なんでか心が明るい。いよいよ今晚、明日の朝、五時ということになる。なんらか記念の文字を書いてくれないませんか、頼んだ。今晚書いておきます。じゃあ明日それを書いておきます。そうして明日の朝5時前、ちゃんと立派な字で真摯に歌を書いたような格好で鉛筆で書いておいた歌にこうある。「朝風に なびくを満たし 彼土より 平和日本の日の丸の旗」明日の朝殺される。朝風に なびくを満たし、彼土より平和日本の日の丸の旗。負けてからなどというものは、今まで一億一心で丸まっておいた日本。それを代表する日の丸の旗。あの日の丸は太陽をかたどったものだと思うが、戦争を負けてからというもの「和」というものがなくなって、「俺が俺が」というそういう勝手な気持ちになった。電車に乗る時も、配給品をもらうときも、何をするときも「俺が俺が」という気持ち。あの日の丸の旗の、丸い丸い完全な丸があらが欠けたり、こちらが崩れたり、まことに悲しい、残念なものだ。こういうことが日記に書いておいた。それが最後の詩の歌になった。「朝風に なびくを満たし、彼土より平和日本の日の丸の旗」今こそ、平和平和、共産党の人も言うんだが、あの当時平和ということを行った人もなければ、聞いたこともない。その日その日の生活に追われて、畜生道か餓鬼道か人間の道を歩むことができなかつた時代。それが仏に救われて、永遠の限ないのちが命の喜びの中に、「朝風に なびくを満たし 彼土より、平和日本の日の丸の旗」、どうか日本中みんな心合わせて平和だ、円満な日本の国にこしらえてもらいたいという、こういう歌を残していつてくれた。

そのあとに立派に亡くなっていった平手くん(平手嘉一元大尉)という北海道所在の人が、この人のお父さんは現在も生きておられて、この前も手紙をよこされて、「だいぶヨボヨボになったが、手の字も書けなくなったが、先生、どうもありがとうございます。」という。その平手さんが、死んでいく、殺される前の晩に、こういう歌を残されていかれた。「母君を、時こそ来たれ御元おんもとに、つかえまつるの時は再び。」小さい時分にお母さんが亡くなった。一人ぼっちで中学校高等学校大学と、お友達のうちに行くたびに、「この子にはお母さんがいない、かわいそうだ。」と親切にお友達のお母さんが来てくださればくださるだけ、なんで私のお母親だけが早く死んだのかなあと、悲しい気持ちに耐えてきたが、いよいよ、明日お母さんのところに行けるといふ喜びが、「母君を、時こそ来たれ御元おんもとに、つかえまつるの時は再び。」

もはやお母さんには、骨に〔 〕思いきっていたわたくしも、明日お母さんのもとに一緒になって、いつまでいつまでもお仕えさせていただき喜び殺される悲しみじゃない、永遠に生きる喜びの歌を詠まれた。また、「弥陀仏のたすけてふねのあればこそ、つたなき我も母

のみ許に。」阿弥陀様のご本願の尊いふねがあればこそ座禅で悟ることもできなかつた、学問で悟ることもできなかつた、このつまらない私（わたくし）が明日お母さんのところへ、阿弥陀様の本願力によって連れて行って下さるんだという喜びの歌がひとりでに、殺される前の晩にできたというんで、喜んで私に教えてくれた。

またこういうことがどんどんでできた。ほとんど若い30前の人。そのうちフィリピンから巣鴨に移されて、そうしてこの人だけまた調べてほしい。この人直接の責任じゃない、この人の隣の部隊の兵隊さんたちが、夜な夜な街に出かけて悪いことした。この人たちの責任で、この人が銃殺刑となったんだが、これは気の毒だ。自分の部下ではない。日本の軍人として部下の責任を取る上官がないので、この人が責任になったんだ、もう一度調べ直してほしい。マッカーサー元帥のところへ送られてきて、まだ東条さんたちが処刑される一か月前だから、マッカーサー元帥が手を加えなかつた。フィリピンの裁判の判決通り、銃殺刑。この人だけが銃殺刑になったんです。いよいよ銃殺刑を受けるために、巣鴨から真夜中の12時過ぎて、わたくしとアメリカの軍人や兵隊さんたち、鉄砲を持った兵隊さんたちと一緒に、小型のバスに乗って、昔の近衛第3連隊があるところまで行く途中色々話しておった。「先生、ここはどこでしょうか?」「ここはこの辺だ」「ここはどうでしょうか」と話していたときに、自然に両手縛られて、行く間ゲゲー居眠りをされた。朝からぶっ通して、長い長い色々書き残されて、奥さんやら子どもさんやら兄弟やら、そのために疲れたんでしょけど、話してたら、しばらくずっとゲゲーいびきかいて寝られていた。目さまされたら私が「尾家さん、尾家さん。あなたいびきかいて寝られてたですね。」こう申したところ、「ありがたいですなあ、死するところ帰するがごとし、南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏。死んでいくということは、帰るようなものでございます。親様のもとへ帰らせていただくことでございます。」銃殺刑を受けるのは平気なの。堂々と胸のところに3発4発撃たれてもまだ立っている。少し息をされたと思ったら、自然と肺が広がったんでしょ。最後まで堂々と亡くなって逝かれた姿を見て、アメリカの将校も兵隊たちも感心しておった。「日本の軍人は立派ですなあ。」わたくしに言われた。

そういうようなことがさんざん続いた後に、A級の七人の方々が亡くなっていかれる。東条大将のごときは、いよいよ殺される日の朝、「先生昨夜は最後のご宣告を受けて、本当にうれしかった。あのまま連れ出されて殺されると思ったんだが、24時間の時間を与えてくれた。本当にありがたかったが、巣鴨の所長に挨拶をして出てくるのを忘れていたから、あなたからお礼を言っておいて下さい。今朝起きてゆっくり起きて、家内にこんな歌を作りました。」「どんな歌ですか」と。「さらばなり、有為の奥山今日超えて、弥陀の身許に行くぞ嬉しき」国の奥山を今日超えて、長い間生まれたり死んだり生まれたり死んだり、有為転変の、この限りある人間の世界が最後、「さらばなり、有為の奥山今日を超え、弥陀のみ許に行くぞ嬉しき」永遠の世界、死ぬことのない永遠の世界、喜び。そこに行って静かに休むのかと

いうとそうではない。その次の歌が「我逝くもまたこの土地に還りこむ、国に報ゆることのたらねば」阿弥陀様のご本願力によって連れていかれても、またこの土地に還りこむ。国に報いることをのたらねば。申し訳のない戦争で、大勢の方にご迷惑をかけたが、今度こそは、永遠の万世の平和のために、文化日本国家の礎石となって、働かせていただきます。土肥原大将のごときも、「踏み出せばせまきもひろく変わるなり、二河白道もかくやあらなん」二河白道のあのお話を先生に承ったが、火の川・水の川、底なしの火の川・水の川、落ちたら最後、二度と上がることはできない。間に細い三寸四寸の白道がとおっている。後ろから恐ろしい鬼どもや獣が追っかけてくる。たまたま、向こうの岸から、「汝一心正念にしてただちに來たれ。」心配するな、白道を走ってわたってきなさい、守ってあげます。阿弥陀様の呼び声、あの声を聞いてどうか心配しないで行きなさい。お釈迦様もこのお声を信じ切って、白道を渡って何の心配もない。不思議につくことができたというお話でございましたが、「踏み出せば狭きも広く変わるなり」恐ろしい恐ろしい、落っこちやしないかとためらっていたときは、三寸や四寸の狭い白道かもしれませんが、阿弥陀様のお呼び声で、お釈迦様を遣わせて来いと信じ切って渡れば、ひろうなってしまいます。ありがとうございますといて、白道を駆けあがらんという歌を残されていった。

また板垣大将のごときも、色々残されたが、いま金沢の聖徳堂に飾っておりますのが、まだ東京裁判の決定する前の、昭和23年の春、あの人たちがどうなるか分からん時代に、橋本欣五郎大佐から頼まれて、みんなの、畑元帥^{はた}だとか荒木大将だとか、オニ手本がある。筆で書いてある。その実物は国会図書館に寄付された。これをいくつかコピーされた。写真を撮られた。あちらこちらに、お渡しされたのを、私のところに寄付された方があります。横浜の方。そのなかに、たまたま7人のA級の人が全部書いておられる。そのなかに、板垣大将が書いておられる言葉が、「世間虚仮、唯仏是真」（せけんこけ ゆいぶつぜしん）」なんです。聖徳太子の言葉、聖徳太子様が亡くなられて、橘女郎女（たちばなのおいらつめ）が長い間、ご恩になった仮住まい、今どういう世界に往生しておられるのだろうか。わたしたちのような人間には拝むことしかできないが、せめて私たちのつたない手で、〔 〕で織り出して、と推古天皇にお願いしたところ、推古天皇のむりもない宮中の女官全員で作らしましょう。こうやって作られた、有名な天寿国曼陀羅の中に太子様のお言葉として〔 〕られた。「世間虚仮、唯仏是真」この世の中というものは仮のものである。偽りのものである。ただ、仏様の世界だけが真実である。太子様から教えられた、仮と真実、相対と絶対、迷いと悟り、これをはっきりと太子様からご家庭の方々に教えておられたことと、橘女郎女が赤い糸で織りだしてみえる断片がいま、中宮寺に残っている。ご覧になったと思いますが、この言葉を板垣大将が書いておられる。それは、私が巣鴨でお話したことを書いたのであろうと思う。広田さん、木村さん、武藤さん、みんなそれぞれ書いておられますが、松井大将が詩を作っておられる。どんな詩かと申しますと、この巣鴨の牢屋にとらわれて2年3年になる。東京裁

判がいつ終わるか知らんけれども、まもなく裁判の終りが間もなくやってくるころだ。ちょうど、思い出せば夢のようなもんだが、私の心の中は安らかで、仏様のお気持ちのような、いつお浄土へ、仏様が導く世界に行けるのかなあ、いずれのときにか、涅槃に到らん。こういう最後の結びの詩を松井大将は書いておられる。そういうことで、最大の大將なり、B級の大將の方なり、C級の軍属なり、大尉中尉、若い人たちも年取った人たちも立派に永遠の世界に生き続ける。この気持ちで、恨みなく、憎しみなく、はらだちなく、安らかな気持ちで大往生されていったのでありますが、実に太子様が初めて日本に仏教を持ち込んでおられて、篤く三宝を敬えとこう仰せになった。「仏法僧」の三つの宝こそ、永遠に滅びることのない〔 〕である、ということをつくづくわたくしは、3年半の巣鴨の戦後の日本の責任を負って殺されていかれた人たちのこの実態の姿によって、教えられたのでございます。その、一部分をその後、あちらこちらにお招きをいただいてお伝えをしてきたわけでございます。ちょっとおやすみに……

(午後後半)

ただ今、終戦からあと私が『勝鬘經義疏』を岩波文庫に出すことになったことにつづいて、巣鴨プリズンの中にあった一部のあらましを申し上げたのでございまして、この中で、一番最初の由利敬さんが亡くなられた時、わたくしはきょうの出来事は全部秘密。巣鴨の中の人たちにも、また外部の人たちにもしゃべってはならない。こういう嚴重なことを巣鴨の所長から命じられておったので、由利さんのひとりのお母さん、心配しておられるだろうが、なんとかして知らせてあげたいなあ。しかし、全然日本の通信網というものは、完全にマッカーサー司令部に抑えられておる。黙っておれといわれたものを、これを発表することは、これはよくない。またわたくし自身の今後のことにも関する。考えたが、何とかして知らせてあげたいなあ。巣鴨からわたくしの現在の東久留米の家までアメリカのチャブレン、キリスト教の大尉の牧師さんが、ドライブして送ってくれます途中で、小さな郵便局の前を通る。「ちょっとここで止めてくれませんか？」とたのみまして、そこで、由利さんのおかあさん、九州の太宰府におられましたお母さんに電報を打ってあげたい。「知らすな」という命令に対して、電報を打つんだから、よほど勇気がいる。そこで、わたしはこういう電報を打った。これなら差し支えなからう。こう考えまして、「昭和21年8月5日何時何分、花山」といった。そうして、家にもどった。「言うな」と言われたけれども、夕べどういうことがあったか、どこで泊まったか、家内に知らさないわけにはいかん、こういうことがあった。人に言うな。こういう命令があった。近所の人はもちろん、子どもにも言っちゃいかん。こういって、夕べほとんど寝ていないので、床(布団)をのべてもらって休んでおったが、すぐさま至急電報がやってきた。「お父さん、至急電報だ」「どこから来た」「九州の大宰府、由利つぐ」と

書いてあった。由利さんのお母さんだ開いてみると、「電文の意味、分からない、はっきり知らせてほしい。」（聴衆の笑い声）これは無理がない。「何年何月何日何時何分、花山」お母さんとしては、心配しておられるのだから無理もない（聴衆：うん、うん）。おまけにそのときに至急電報の返信料がついておる。なかなか戦後の苦しい時代。お母さん一人の生活でも苦しかったらう。それに電報の至急料がある、至急電報の料金の払い込みがある。返事しないわけにはいかん。そこで私いろいろ考えて、「死す、花山」といった。「花山死んだ」かどうか知らんが（聴衆：笑）、「死す、花山」といった。お母さんなら、前の電報と2回目の電報でわかるだろうと、マッカーサー元帥には分からないだろうけども、と考えてとで「死す、花山」と書いた。そうしたら、またお母さんから電報が来た。「戒名ぜひ頼む」（聴衆：笑）おかあさん、やっとわかって下さった。どうせ駄目だったんだ、私に法名をつけてくれと。

ほかの宗旨では「戒名」という、戒律を受けたときの名前、真宗では親鸞聖人以来、戒律がない。戒律を守ろうにも守れない。親鸞聖人ご自身の、比叡山を降りてから、そのみ教えのなかに伝わっている、本願寺系統では戒名とは言わない。「法名」という。仏法の名前だ。生まれたときには親御さんの姓、先祖代々の姓、そして個人の名、で通っていますが、亡くなったときには永遠の仏様にさせてもらう。仏法の名前になる必要があるから、「釈になに」という名前になる。他では戒名という。そこで考えた。人間の世界ではいろいろ差別がある。大将もあれば、英族もある。軍属もある。いろいろある。年取った人もいる若い人もいる。男も女も、金持ちも貧乏人も。しかし、お浄土では平等一如である。みんなひとつになる。お浄土では、救われる我々も、救うていただく阿弥陀様も一体である。変わりっこない。阿弥陀様という方はインドの発音で「アミター」限りないという意味。何が限りないかというと、命に限りがないという仏である。知恵に限りがない仏様。これがインドの「アミターバーブダ」、「アミターユスブダ」って言葉という意味、「ユス」が『命』、「バー」が『知恵、光』。親鸞聖人は、そのことを正信偈（しょうしんげ）のなかではっきりと表されて、「帰命無量寿如来」「南無不可思議光」百二十行での、まず最初にお示ししてくださいまして、「無量寿の仏様に帰命し奉らん。」命に限りない、仏様にすべてにお任せいたしますという「きみょうむりょうじゅによらい なむふかしぎこう」帰命も南無も一緒。インドの言葉では「南無」という。支那の文字に充てて南という字と、無という字をあてた。なむふかぎこう、ふかしぎもひかり、光明なんです。仏様の知恵なり、悟りなり、我々では測りしえない、この知恵の仏様に南無し奉らん。帰命し奉る。おしたい申し奉る。こういう素直な気持ちが、正信偈の初めに「帰命無量寿如来 南無不可思議光」、分かりやすい言葉で申しますと、命に限りない、知恵に限りない、お浄土の仏様にすべてお任せもうしあげます。ありがとうございますという気持ちが「帰命無量寿如来」「南無不可思議光」、それをインドの発音で「南無阿弥陀仏」という六字はインドのお釈迦様の国の言葉。それを中国のシナでは、独自に発音をうつしたのが、そのまま日本にも伝わった。法然上人だろうと、親鸞聖人だろうと、「南無阿

弥陀仏、南無阿弥陀仏」私たちが今、それを教えられて、数珠を手にかけて、「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」と感謝御礼申しあげる。由利さんもこの世界では、中尉、陸軍中尉、戦犯C級の人としてアメリカの人に殺された。お浄土では仏様と一体になると、こう考えて、「光寿無量院」ひかりといのち、「光寿無量院」とむりょう、はかりしることができない。光明無量、光明無量寿命無量、光寿無量院という院号を考えて、どの宗旨でも四字の院号はない。私は今までの長い習慣にとらわれる必要なかろう。新しい日本が、新しい昭和日本、文化日本がこれからスタートするんだから、千三百何十年の長い歴史に左右されなくてもよかろう。

こう考えて、「光寿無量院」という院を、「釈勝敬」勝は信勝の「勝」、釈はお釈迦様の「釈」、敬は親御さんからつけてもらった、由利敬の「敬」。「光寿無量院釈勝敬」何年何月何日と書いて、速達で、電報でそれを知らせた。こういうことが始まりで、それからずっとあと殺された人たちのほとんど例外なしに、「光寿無量院、何某」であった。東条さんだろうと、由利さんだろうと、変わらない。みんな平等に、「光寿無量院」と名付けて、あとの「釈」のあとだけが違う。こういうことにして差しあげたのでございますが、私が入力から頼まれて何か書くときは、「光寿無量」と書いて差し上げることになっておりますが、本願寺のご門主でも、禅宗の管長さまや禅師でも、各宗でも高野山だろうが天台宗だろうが、各宗の偉い方々から、「光寿無量」、「光寿無量」と書かれた。あるいは小幅なり、あるいは額なり、あるいは色紙なり。そういうものが、五十何枚、私のもとに上っておりますのでは、昭和の歴史、この昭和のいろいろな複雑な歴史が、最後には「光寿無量院」に結びついていったということで、ほとんどの人が亡くなっておられる。西本願寺の御門主だけがいま生きておられる。あとは全部亡くなられた方のものを、大事に収めております。

東条さんたち7人が思いがけなく、大安心立命で、アメリカの軍人や兵隊まで、「ありがとう、ご苦労さんであった」と挨拶をしながら、殺していくアメリカの将校と握手しながら手を握られながら、殺すものと殺されるもの、戦争に勝ったもの、負けたもの、アメリカ人と日本人、裁判したものとされたもの、キリスト教と仏教、こういう違いがあっても、静かに握手をして別れている、ようなことまで、新聞に堂々と出たもんだから、こりゃあ大変だ。わたくしという人間がどんな人間か顔をいっぺん見てみたい。実際に話を聞いてみたいということが主になって、名古屋のお東の別院、いまの本堂のできる前、大きな仮御殿で話をしてもらいたいというのが始まりで、あそこに出たところが、何千、何万か、本堂のなかには入りきれない、境内にみんな聞いて集まった。共産党の人だろうと、神道の神主さんであろうと、天理教であろうと、金光教であろうと、真宗であろうと、禅宗であろうと、宗教のない人だろうとある人だろうとみんな集まって、私の顔を見ようとして集まられた。岐阜から中村久子という手と足のない人が、わざわざおんぶされて、苦しい汽車に乗って、出てきて、わたくしの話を聞かれた。これが中村さんとはじめてのめぐり逢いではありますが、まあ、いろいろな方が大勢お聞きくださった。本堂の中ではいけないから、机出した縁側の一番隅っこ

にマイクを持ってって、そこで机を出して、境内に向かって私は話をした。ありゃあ、いまの中日新聞でありますかね。あの当時の名古屋通信が主催したから、あれだけの人が集まったが、そのあと「わたくしのところに話をしてくれ」というのが日毎、いっぱい集まった。別院の輪番さん、心配されて、これはいかんということで、よそのうちにひばってこられた。どこへ行ったか忘れましたが、そこで中村久子さんがおんぶされてやって来て、挨拶したのが始まり。

そこでお任せしますと言って、スケジュールをお任せして、出かけてきたのが、蒲郡のもっと向こうであったと思う。管原さんのお力添えで歩いて行ってんだが、ずっと汽車に乗れない。だから消防自動車に乗せられたり、あるいは自転車に乗せられたり、オートバイに乗せられたり、馬の背中に乗せられたり（聴衆：笑）、ほとんど汽車に乗らないで、1日4か所・5か所、顔だけ見せてくれとって、回った時におそらく、ここにも上がったのが初めてであったと思う。それが昭和24年の3月の終りの日であった。記録がありますので、ここで皆さまにあらこちらからバスで、あるいはトラックで集まってこられた方に、お目にかかったのが始まりで、それからのご因縁が長らく、ときどきこちらへおじゃまさせていただいて、こうして皆様にお目にかかっておるのでございますが、おそらくこうやって東海道を走って、それから京都から大阪近くまでほとんど汽車に乗らずに行った。トヨタ自動車の工場でお話したことを覚えている。境内で、工場には場所がなかったので。

その後、各宗のご本山、西本願寺のご本山や、津の専修寺のご本山や、鶴見の曹洞宗のご本山をはじめ、あらこちらのご本山に、禅宗であろうと、何宗であろうとそういったところは容赦ない。キリスト教の教会でお話ししたことがある。天理教の教会でお話ししたことがある。金光教の本部でお話ししたこともある。あるいは警察、学校の校庭でお話しした場合もある。学校の先生は宗教の話をして、学校に責任がかかってはいかんということで、校長さんは姿を隠しておられなかったが、PTAの人たちが学校を中心にやるもんだから、校庭を中心にお話をさせるものだったから、結局小学校や中学校の校庭でしたことがずいぶんある。あらこちら全国、とうとう、北海道の果てから鹿児島島の果て、宮崎の果てまで、わたくしが大学で講義が休み、夏休み、春休み、冬休み、休みの間はずっとお招きに応じて、わたくしのほうで順序をつけて、お回りしてお話を申し上げたのでございます。

たいていの大きなお寺では、特に津市の一身田のときはそうだった。ご内陣、ご本山のご内陣の後堂のほうから下陣まで、いっぱいになったんです。お寺入ったことがない人たちだから、どこでも自由に入っちゃう（聴衆：笑）で、ご門主さんが裏門から出られようとしても足をまたいで出られたあとを私はついて裏から出たのでありまして、それほど大勢の人が集まった。ご影堂いっぱいだったことを覚えておりますし、お寺ではいろいろと縁を作り出しておられ、そこに人がガラガラと、せっかく作った縁が皆、こう壊れて、乗とった人がみな落っこちてしまう（聴衆：笑）。入ったことのないお内陣だから、お内陣に入った人

はこっそりガラッと、落ちてしまうことがある。私のいったところはずいぶんそういったお寺があったのでございますが、まあ、これが聖徳太子様の初めて日本の国に仏法を受け入れてくださった。その太子様をお勉強させていただいたわたくしがたまたま、敗戦によった日本の巣鴨のプリズンに私だけが知っておることでございますが、最後の場面は、ご家族も、それから新聞班も写真班もひとりも中に入れない。知っているのはアメリカの軍人、兵隊のわずかの人たちで、向こうはみなアメリカに帰って行ってしまふ。日本人としてはわたくしだけであったから、そういうあっちこっちから聞かれたんでしようが、それが因縁となって、仏法の実際の尊いみことの幾分かをお伝えいたし申し上げることになったのが、ありがたかったのでございます。

ところで今朝ほど申し上げた法隆寺の夏期大学の件であります。私たちは聖徳太子奉賛会の理事とさせられて、何とかしなくちゃならんだけけれど、戦争に負けたために、聖徳太子奉賛会の財産、基本金をはじめ全部なくなりました。ということは、満州鉄道も株を相当買ってあったらしいのだが、全部価値が「0」になってしまった。だから、聖徳太子奉賛会の大きな活動が全然できなくなりました。そこで、どうしようか。今更お金を集めるといったって、貧乏学者ばかり4人か5人、どうせこれじゃあ、ろくなお金は集まらないし、それじゃ手弁当を持って弁当を持って、太子様のお寺、奈良の法隆寺で「夏期大学」という名前で、お互いの勉強したことを中心にお話する会を作ってみようかで、やりかけたのが昭和26年（1951）の夏、7月22日と23日であったのであります。22日が太子様の日で、そのあくる日だった。仏教考古学を始められた石田茂作（いしだ・もさく）さん。3年前に亡くなられた。立派な仏教学者・考古学学者。この方。それから坂本太郎（さかもと・たろう）さん、これは日本の歴史では最高の歴史学者・皇太子さまにずっと勉強を教えておられたし、文化功労者にもなられた。それから、大岡實（おおおか・みのる）さん。これはわたくしの金沢の寺の八角堂夢殿の建設をさせていただいたあと、日本中の仏舎利塔を作っておる。それからインド、ヨーロッパのイギリス、アメリカ。あちらこちらで塔を作っている世界的な建築の第一人者です。わたくしの聖徳太子研究。この4人が、4人とも聖徳太子奉賛会からお金をいただいて研究員として育てられたものでございます。それで、4人で弁当を持ちながら、お互いに知らないことを勉強しようじゃないかということで、当時全国から参じてくれる人たちにそれぞれが知っていることをお伝えしようというのが、初めて法隆寺で夏期大学としてスタートしたのが、昭和26年であります。石田君の言うのには、「成功するか失敗するかは分からないから『第1回』というのはやめましょう。」こういうことだったのであります。これが第1回となりまして、ちょうどことしが第30回になる。30年間、法隆寺における夏期大学というものが続けられている。坂本先生は歴史を中心に、石田先生は亡くなられる2、3年前まで仏教考古学のことを中心に、大岡さんは仏教建築を中心に、私は太子様の三経義疏を中心に、お話をしていたのが、ことしが30年目の記念の年であると

いうので、そこで、私は30年以前のまた30年、聖徳太子の1300年の御忌が、たまたま法隆寺で開かれたのが、東京大学を卒業した年で、大正10年（1921）、それから60年、太子様にご指導いただいた、わたくしの立場を申し上げたいと思って、60年を回顧する「回顧60年」という題目で今年はお話申し上げますのですが、きょうもこちら様のお話も題目は一緒ですが、聞く人たちの立場が違うから、法隆寺の方は若い人たちが多くて、仏教というものに初めて接する人たちも少なくない。建築とか歴史とか、考古学とかに興味を持っている人たちも多いのでございますから、こちらで申し上げたことは申し上げませんが、しかも時間は1時間と15分くらいだからその間で申し上げるつもりでございますが、青木先生のお言葉によって、法隆寺に行く前に、こちら様のお寺で虫干の日だから、ということで今朝2時間、そしてきょうもこれで約2時間、4時間いろいろと申し上げた次第です。

わたくしが60で東京大学をやめたのが、定年で辞めたのが、昭和34年（1959）の3月であります。大学を辞めると、他の先生たちは私立大学の先生になられるのが通例でございますが、わたくしの場合は、アメリカ仏教団の開教総長になってほしいというのが、アメリカからもカナダからも本願寺からも、まあせつせと云われた。初めはためらった。ためらいましたが、そうだ日本では一応北海道から九州の果てまで、お話をさせてもらった。アメリカやカナダの人たちにも、またアメリカの人たちにも仏法を教えてあげる、伝えてあげることも大事だ。私は60で死んだと思えば、あとは御恩報謝で働かせてもらおう。中国から鑑真（がんにん）大和上という偉い方が、日本へ聖徳太子のことを慕いながら、大勢のお弟子を引き連れて、東大寺の大仏様が出来上がった直後、目も目くらになって日本に来られて、仏法を教えていただき、命がけで、まあ仏法をインドから中央アジア、中央アジアから中国、中国から日本、日本からアメリカ、世界中へ仏法を伝えるため、骨をうずめる覚悟で出かけましよう。という決心で出かけたのであります。アメリカの開教総長、カナダの開教総長、それからアメリカの仏教研究所の所長。こういう重い役目を兼ねながら、ほとんど毎日のように飛行機でアメリカ中、カナダ中飛び回って、今までの学問の生活と違う。伝道の生活をやっておったのでおりましたのが、アメリカにもだんだん立派な人が育ちまして、もう、日本へ帰ってもいいということになって、10年近くアメリカでお仕事をさせていただいて、日本に帰ってきたのが今から10年前昭和44年（1969）であったのございますが、その私もいろいろ私の生涯のために、仏法研究、太子様のお導きで勉強させてもらった。

帰ってきてからは、今まで岩波文庫で、『法華経義疏』と、それから『勝鬘経義疏』は出しましたが、維摩経の義疏がまだ出ておらんから、なんとか『維摩経義疏』をとという声がありました、そこでこの3つをまとめて、訳して解説を付けたのがアメリカ行ってから、サンフランシスコにおる間に原稿を日本に送って、そして出してもらったのが、これが『国訳一切経』というお経とともに、シナの仏教書と日本の仏教書をまたたくさん出された『国訳一切経』のなかの16番目として、聖徳太子の『三経義疏』全体を出させてもらった。これはアメリカ

行ってからであります、帰ってきてからどうも腑に落ちない、まだ十分でないというので、一度、今から10年前昭和46年に書物で出したのが、『維摩経義疏』。その後岩波文庫でもう一度、お経と一緒にして、注釈、太子様の注釈を分かりやすいようにと考えて、岩波文庫のなかに法華経の義疏を上下巻として出していただいたのがあり、その後、勝鬘経の義疏、勝鬘経の太子様のご注釈の似たものが、敦煌から見つけ出された。それが北京の図書館にある。その写真が日本にいくつも来ておる。ということで、中には十分内容も研究しないで、聖徳太子の『勝鬘経義疏』というけども、「あれはシナの坊さんが作ったものだ。それが聖徳太子の時に来たんだらう。大したもんじゃない」という人もありまして、相当な〔 〕ではありますが、そのこともはっきりと見極めておかなければいけないと思ひまして、太子の『勝鬘経義疏』と、太子が小野妹子を、隋に遣わせて、お取り寄せになってお手本としてお持ちになったものも、そのコピーが今、北京の図書館にあることがはっきりいたしまして、やはり、『勝鬘経義疏』も『法華義疏』も『維摩経義疏』も太子のものでなければいけないというはっきりとした結論を出して、2年前に『勝鬘経義疏』を出させていただいた。この度、わたくしの金沢の聖徳堂が建ててちょうど20年になる。そこで、20周年を記念して、来年の聖徳太子の1360年を1年繰り上げて、太子の1360年の行事をお勤め申し上げて、もういちど維摩経の義疏を徹底的に訳しなおして、この間5月に出した。『維摩経義疏』であります。これで私が60年間、前田先生から『法華義疏』の講義を聞いて以来60年間、太子様の『三経義疏』について勉強させてもらった、この人間として日本に生み出させていただいた。この私自身を感謝し、太子様をはじめ、こういうことに向けてくださった直接間接の皆様方に厚く御礼申し上げます。こういう気持ちで、出来上がったものが天皇様をはじめ、皇太子さまにも皇后さまにも皆、各宮様をはじめ、あるいは侍従長、侍従次長、本願寺の御門主や新しい門主はじめ皆さんに差し上げた。大阪の四天王寺の管長さん、あるいは法隆寺の管長さんに差し上げることにして、こうして今日までこうして私が何とか無事で生きさせていただいた御恩を感謝し、こちらにたびたびあわせていただいて、幾たびもお話しさせていただいたような、青木先生始めご参詣の皆様たちにも篤くお礼を申し上げて……毎日毎日きょうのこの日を、感謝と御恩に御礼を申し上げる気持ちで生きさせてもらった。今後いつまで命があるかわかりません。明日かもわからん、今晚かもわかりません。これを最後最後という気持ちで、おかげ様きょうも一日生かされた。ああ、もったいない、ありがたい南無阿弥陀仏。あの福原さんの気持ちで、ゆっくりと今日は4時間以上申し上げた次第。ご遠方からはるばる大勢の皆様がお参りいただいて……。

※テープが切れる

(註) この点は記憶の混乱があったようで、1300年御忌の会長と大正13年(1924)聖徳太子奉讃会の発足時の会長は徳川頼倫であり、その後奉讃会長に細川護立が就任したようである。